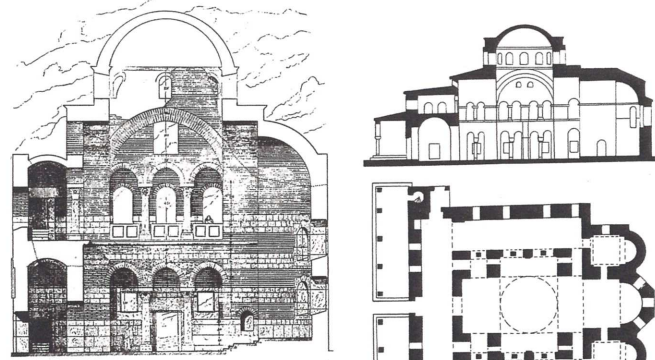
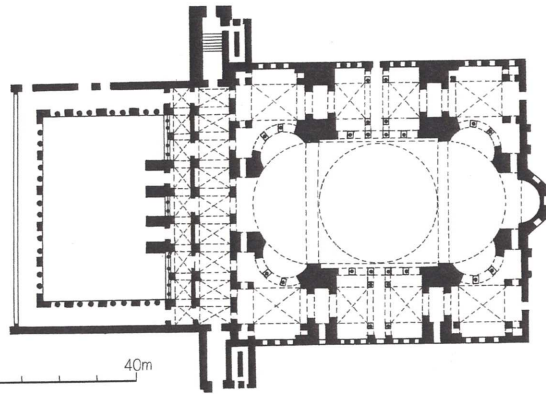
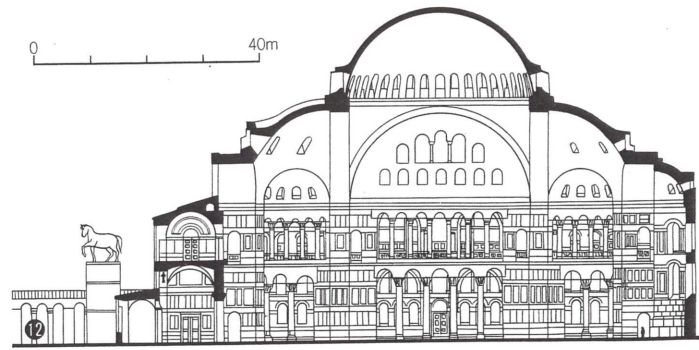
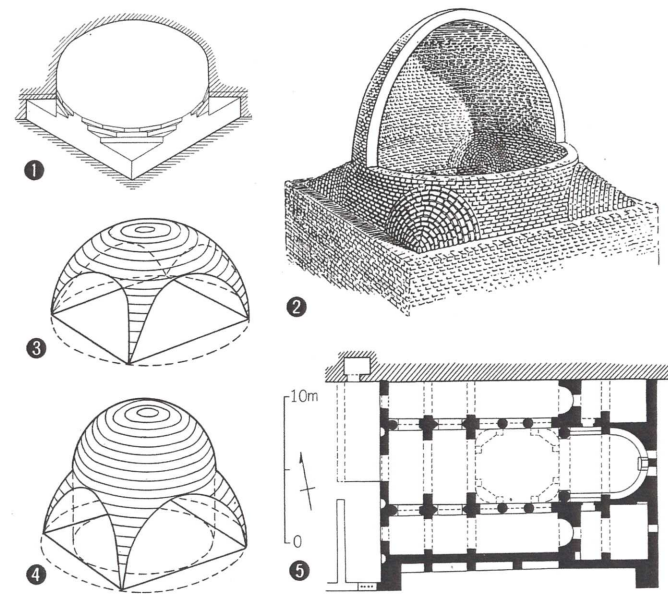


# 西洋建築史図集

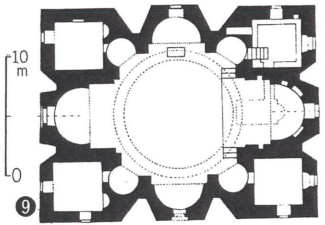
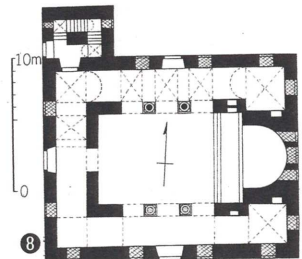
三訂版

日本建築学会編 彰国社刊

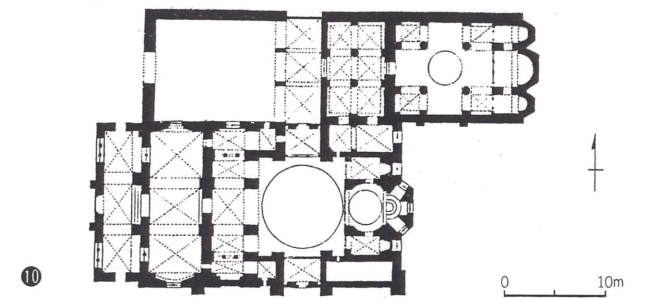
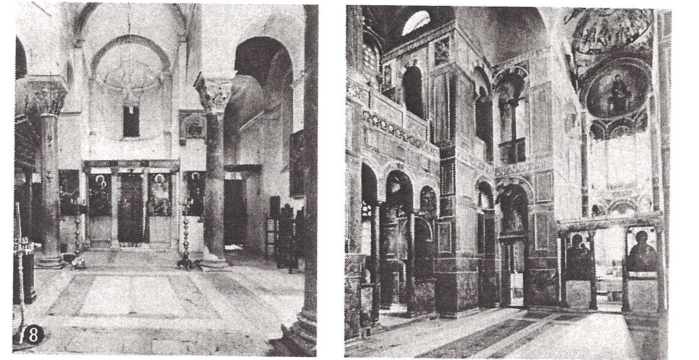
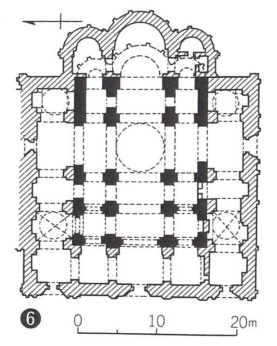
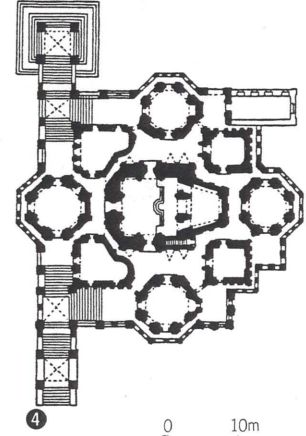
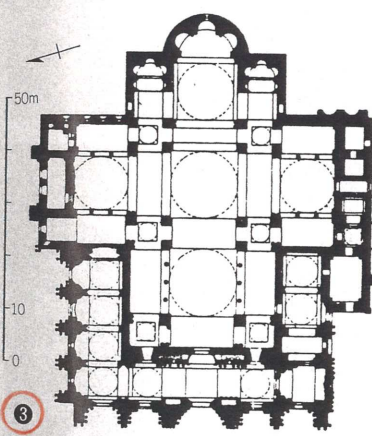
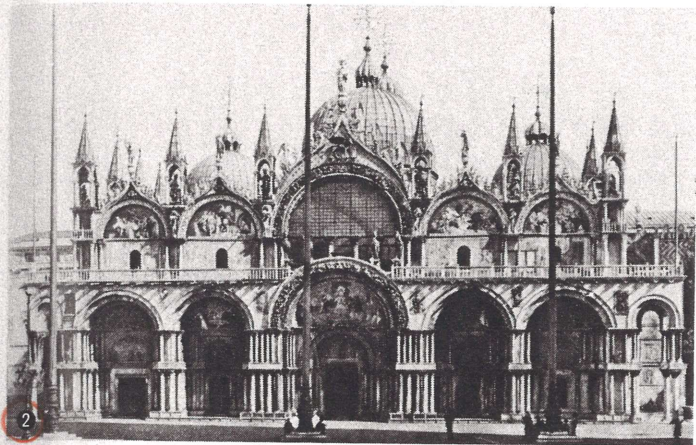
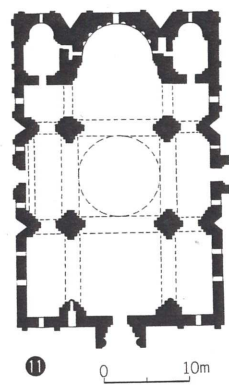


7 0 5 10 15m

8 0 30m



- 1,2 スクイッチ
- 3,4 ベンデンティヴ
- 5 アラハン・モナステル, トルコ。6世紀初め
- 6,8 カスル・イブン・ワルダン, シリア。564ごろ
- 7 ハギア・ソフィア, サロニカ, ギリシア。8世紀初め
- 9,10 聖リブジメ, エチミアジン, ソ連。618
- 11 アニ大聖堂, トルコ。989~1010
- 12~15 ハギア・ソフィア, イスタンブール。532~537



- 1~3 サン・マルコ, ヴェネチア, イタリア。1063~90ごろ
- 4,11 聖バシリ, モスクワ。1555~60創建, 17世紀改装
- 5,6 ウラディミール大聖堂, ソ連。1158~60創建, 1185~89増築
- 7~10 ホシオス・ルカス, ギリシア。10世紀中ごろおよび11世紀初め



の集中式教会堂である。聖リプジメの壁体は整然とした切石積み of 内部にコンクリートを詰めたもので、外観は重厚で平らな壁面が多いが、四葉形を形成する翼屋の両端にはV字断面の大きなニッチを設けて外観の単調さを破っている。このニッチはアルメニア、ゲオルギアに特有のモチーフで、その後も盛んに用いられた。室内は隅角部の前室の上に設けたスクィンチと翼屋のアーチとをペンデンティヴで連結し、その上に採光窓のある円形ドラムを立て、軽微な放射状リブを刻み出したドームを架ける。アルメニア、ゲオルギアで用いられたリブはイスラム建築にも受け継がれた。アルメニアの集中式教会堂は年代が明らかなものが多い。6〜7世紀に大量に出現したときにすでに完成した形式となっているところから、それ以前に長い試行期間があると推定し、アルメニアをビザンチンのドーム建築の起源とする説がストルツゴフスキーにより出された。しかし試行期間を立証する遺構が全くないところから、むしろ東ローマ各地で試みられていたドーム集中式を受け入れて発展させたとも言われる。しかしながらアルメニアは地理的には東西を結ぶ接点上にあるところから、その建築は東西双方からの影響を受けて発達し、東西の建築上の伝統を交流させる役割を果たしたとするのが妥当とされる。東ローマでは特に6〜9世紀の遺構が極めて少なく、年代も明らかではないため、当時のアルメニアの教会堂は極めて貴重な遺構である。

- J. Strzowski, Die Baukunst der Armenier und Europa, Wien, 1918
- 牧正洋, アルメニア建築史研究, 建築史研究40号, 1976, p.30-48

## 28-11

**アニ大聖堂, トルコ, 989~1010年** Ani 前後にトンネル・ヴォールト、堂中央にドームを架けたアルメニアのドーム・バシリカは単廊式と3廊式とに分けられる。単廊式は外壁から室内に突出するピアによって室内を3ベイとし、中央ベイのピアの頂部を横断アーチと幅の広い壁付アーチで連結し、その間にスクィンチを作ってドラムの基部を形成するがまれにはペンデンティヴも用いられる。3廊式は室内に突出する単廊式のピアを壁体から切り離して独立させたような形式で、側廊の幅は極めて狭いため室内は広間のような印象を与える。このドーム・バシリカは7世紀の集中式とともに10~11世紀にも採用され、教会堂の主たる形式となったと言われる。単廊式ではシラカヴァン(Shirakavan, 9世紀末)、マルマシェン大聖堂(Marmashen, 989~1029)、3廊式ではアニ大聖堂が代表的な作品である。アニはソ連との国境となっているアルパ・チャイ Arpa Çayı の深い谷に臨む台地にあり、後期アルメニア王国の首都であった。二重の城壁で守られていたが、1045年にビザンチンに占領され、次いでセルジュク の支配を経て1236年に蒙古により破壊され放棄された。市内には約1世紀の短い繁栄時代に建てられた各種の教会堂があり、大聖堂は最もよく保存された大規模な遺構で、986年の地震で損傷したコンスタンティノポリスのハギア・ソフィアのドームを修理したアルメニアの建築家トルダト Trdat により作られた。7世紀のアルメニアの教会堂は、窓まわりにわずかに彫刻装飾を用いた美しい切石造の厳しく簡素で重厚な外観であったが、10~11世紀には厳しさが和らげられる。アニ大聖堂では外壁には独特のV形ニッチで強い変化を与えるとともに極めて細い円柱で支持された盲アーケードをめぐる。室内は3廊式だが、側廊が極めて狭く、天井が高いので単廊式の大広間のような雄大な空間となっている。ピアには柱型・付け柱を加えて昇高性を強調し、これらの垂直部材に呼応してアーチを段状に成形する。全面的な石造天井の採用、盲アーケードによる壁面の分節、柱型・付け柱によるピアの分解とアーチの呼応などは中世後期の西欧建築に先行するとともに、これに著しく類似する注目すべき手法である。

- J. Strzowski, Die Baukunst der Armenier und Europa, Wien, 1918, p. 184-187
- A. Khatchatrian, Les origines de la Cathédrale d'Ani, Paris, 1951

## 28-12~15

**ハギア・ソフィア, イスタンブール, 532~537年** Hagia Sophia, Istanbul コンスタンティヌスが建て、テオドシウスII世が再建したハギア・ソフィアは、532年のニカの反乱で焼け落ちたが、ユスティニアヌスにより直ちに再建された。建築家はアンテミウス Anthemius of Tralles とインドロス Isidoros of Miletos で、前者は優れた幾何学者で発明家、後者はアレキサンドリア、次いでコンスタンティノポリスの大学で物理と幾何学を講じていた研究者だが、建築については未経験であったと言われる。558年の地震でドームが崩壊したので甥のインドロスがドームを再建したが、この時にドームは図3の形式から現在のように図4の形式に変えられたのではないと言われる。567年にもドームが落ちたらしく、その後もしばしば修理されている。幅31m、奥行がその2倍という広大な身廊の天井に二つの同大のドームを架けるのではなく、中央の大ドームの東西にこれを支持する形でこれよりやや低い位置に半ドームを架けることにより、室内は盛り上がるような雄大で統一された空間となる。南北方向は4基の巨大なバットレスがドームを支持するが、室内からはほとんどその存在が分からないので、直径31mという大ドームでありながら、重圧感を感じさせない。古代建築の最後を飾るにふさわしい傑作で、15世紀に至るまでこれに比肩する教会堂はついに作られなかった。煉瓦造の壁体は堂外では簡素なモルタル仕上げだが、室内はガラスモザイクや大理石で覆われており、身廊の雄大な空間とアプスや側廊の空間とが流動的に結合され、壮大華麗な別天地を作り出している。ハギア・ソフィアはこのように空間的にも構造的にも比類のない傑作で、身廊と側廊・トリビューンを分かつ列柱のように目につきやすい部分もこれにふさわしく造形的に洗練されている。しかし身廊から側廊への転移部のように目立たない副次的な部分では構造の納まり（たとえば天井）はぎこちなく、装飾細部（たとえば列柱に対応するピアの付け柱）も見劣りがする。工期が極めて短かったため有能な工人が不足したことによるのかも知れない。4基のミナレと西正面のバットレスは16世紀に増築されたもので、この時にアトリウムは取り壊されたとされるが、バットレスの増築は13世紀とも言われる。

- A. M. Schneider, Die Hagia Sophia zu Konstantinopel, Berlin, 1942
- E. H. Swift, Hagia Sophia, New-York, 1940

## 29-1~3

**サン・マルコ, ヴェネツィア, イタリア, 1063~1090年ごろ** Basilica San Marco, Venezia このバシリカは、832年に完成された十字形平面ではほぼ同規模であったと言われる教会堂の基礎と壁体の一部を再用して構造体を短期間に建造し、1073年に最初の献堂式を行った。しかし仕上工事は長びき、室内の列柱は11世紀末~12世紀、ピアと壁体の大理石張りは主として12世紀、モザイクは12~13世紀に作られた。当初西正面だけだったナルテクスは13世紀初めに外陣の南と北側に延長された。これと同時にナルテクス正面は現在見られるように列柱・彫刻・大理石・モザイクで飾られ、深い扉口を加えて整備された。中央扉口の上ののる4頭の青銅製の馬は第4回十字軍(1204~5)がコンスタンティノポリスを占領したときの略奪品。上層の破風は15世紀、モザイクは17世紀に加えられたものである。末期ゴシックやバロックの装飾を混じえた正面は雑然とした印象を与えるが、後世に付加された装飾を除けばユスティニアヌスの聖使徒教会堂を原型とするビザンチン建築の傑作で、1204年当時の外観は最北端の扉口上のモザイクに見ることができる。ユスティニアヌスはコンスタンティヌスが自らの墓廟としてコンスタンティノポリスに建てた十字型平面の聖使徒教会堂(Apostleion)を再建し、550年に献堂した。これは5個のドームを架けた十字形平面の大教会堂で、交差部のドームが最も高く、採光窓のあるドラムの上のっていた。聖使徒は1463年にファチエ・ジャーミ(Fatih Çami 現在のモスクは18世紀後半の再建)を建設するために取り壊されたが、この教会堂はハギア・ソフィアとは異なり、エフェソスの聖ヨハネ(Efes, トルコ, 548ごろ~65)、サン・マ

ルコ、ペリグーのサン・フロン(Perigueux, フランス、→37-3, 10, 11)の原型となった。後期ビザンチンの教会堂のドームは一般に直径3~8m前後に過ぎないが、ドームの下に採光窓のあるドラムを加えてドームを強調する。6世紀の聖使徒に倣ったサン・マルコではドームの直径は約13mにおよぶが、ドラムを用いず、ドームの下部に直接採光窓をうがつに過ぎない。しかし13世紀にはドームの外観を強調するため、頂塔を持つやや異様な形の高い木造ドームを加えた。トリビューンには身廊に面して列柱がなく、また12世紀に2階を側廊と身廊を隔てる列柱部分だけの幅に縮小した点で聖使徒と異なる。しかしモザイク・大理石で外装した重厚な構造体で明確に限定された空間構成は、6世紀の形式を忠実に再現しているが、これはまたホシオス・ルカスのカトリコン(→29-7~10)、ダフニ(Daphni, ギリシア, 1080年ごろ)に認められる明確でバランスのとれた空間構成と通ずるものがある。サン・マルコの原型はコンスタンティノポリスの教会堂だが、サン・ヴィターレ(→27-7, 9~11)とは異なり、構造材料の煉瓦も仕上材料もすべて北イタリアに固有のものを伝統の工法で使用している。

- O. Demus, The Church of San Marco, Washington, 1960

## 29-4, 11

**聖バシリ, モスクワ, 1555~60年** Cathedral of the Virgin of the Intercession by the Moat, 通称 St. Basil the Blessed (Vasily Blazhenny), Moscow モンゴル支配下で着実に勢力を固めてきたモスクワ地方では、モンゴル侵入以前のキエフ(ウラディミール地方)で完成された教会堂の形式を踏襲して発展させた。特に著しい点はドームを中心とする垂直方向の構成を強調するため、ドラムを囲む十字形翼屋の上に、外壁からドラムに向かって順次高く階段状に連続アーチを架け、その最高部にドラムを立てて盛り上がるようなピラミッド状の屋根を架けたことである。この効果は十字形を内接する正方形平面(内接十字平面)の建物において、十字形四隅の天井を十字翼屋の天井よりも低くすることにより完成される。段状アーチの外観は重層の半円ベディメントとなるが、これはすでに12世紀中ごろに出現した手法である。モスクワでは半円の代わりにオージアーチを用い、これを十字翼屋の上だけではなく隅角部の屋根にも配置して装飾的效果を強調した(この装飾的なアーチをココシュニキ kokoshniki と呼ぶ)。またドームの外形も従来の単純な半球のヘルメット形からねぎ花形に変わり、昇高性とその存在を強調した。ドームを中心とするこの昇高性の強調は、室内空間の単一化とともに16世紀の尖頂屋根を頂く塔状の教会堂(天幕形教会堂)で完成された。塔状教会堂は低い主屋の上に高塔を建て上げた木造教会堂の形を石・煉瓦に引き写し、これにココシュニキなど各種のモチーフを加えたもので、聖バシリは極度に装飾化された代表的な作品である。約200年にわたってロシアを支配してきたモンゴルの最後の拠点の一つであるカザンの奪回を記念してイワンIV世がモスクワ市心の赤の広場に建てさせた。西側の階段から昇る高く広い基壇の中央に勝利の仲介者である聖母マリアにささげた不規則な八角形平面で高さ約46mの塔状の教会堂を建て、その周囲に塔状の祭室8室を配置し、平屋建の廊下と外周の通路で相互に連結したもので、祭室はカザン周辺で勝利の戦闘が行われた日にゆかりを持つ聖者にささげられたが、大会堂の入口を兼ねる西側の祭室は救世主としての皇帝の役割を象徴して「イェルサレム入りの祭」に献堂された。モンゴルを駆逐した当時の新生ロシアはギリシア正教の中心で東ローマの後継者、首都モスクワは第2のローマであったコンスタンティノポリスに代わる第3のローマに比定され、皇帝は聖俗両界に君臨する体制を固めていた。決定的勝利の記念堂にはロシア独自の木造建築を母胎とする新しい塔状教会堂の形式が意識的に求められたわけである。しかし9塔を群立させたこの教会堂も完成時は現在よりも形態・色調は穏やかなものであったと言われる。17世紀にドームはねぎ花形に改造され、開放式であった外側通路に尖頂屋根を持つ屋根を加え、煉瓦造のドラムに彩色タイルを張り、赤・白・緑・黄色の華やかな塗装を

施された。室内は中空の塔のような空間で、平屋建の通路を除き仕上げは極めて簡素で、当初は煉瓦造の壁体にのりを掛けただけであった。聖バシリカという通称は大聖堂の北東隅に1588年に増築され、聖者バジリにささげられた祭室に由来する。彼はイワンIV世の残虐さを恐れずに告発し、民衆から尊崇された人物で、皇帝の死後聖者に列せられた。木造建築を原型とし、これにビザンチンとイタリア・ルネサンスのモチーフを同化し、さらにベルシア、インドなどイスラムの要素を加えた幻想的なこの教会堂は、全体としての模倣作品を生まなかったが、個々のエレメントは16~17世紀の教会堂建築に大きな影響を与えた。塔状教会堂に見られるバロック的傾向は主教ニコン(Nikon, 1652~67)により否定され、クレムリン聖母昇天大聖堂(Cathedral of Assumption, 1475~79)に見られる5ドーム式の古典的形態へ復帰が命ぜられた。これによって装飾・形態は依然として華やかだが、教会堂は明快な構成のものに変化してゆく。

- H. Faesen and V. Ivanov, Early Russian Architecture, London, 1975, p. 441/444

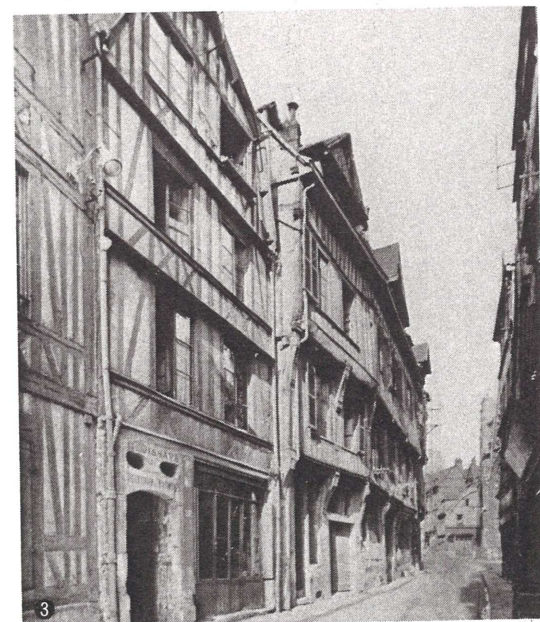
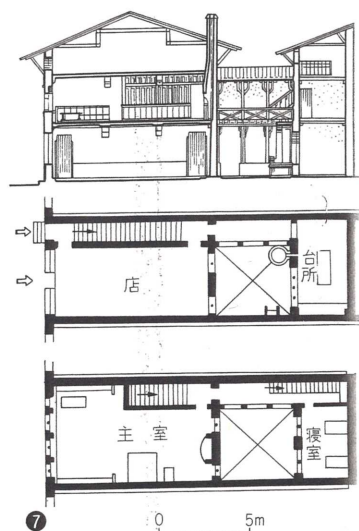
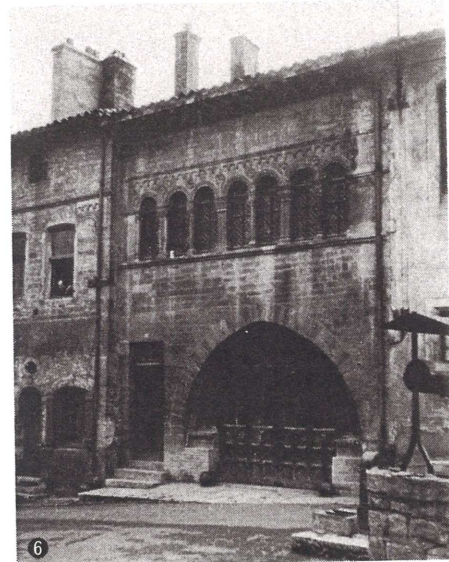
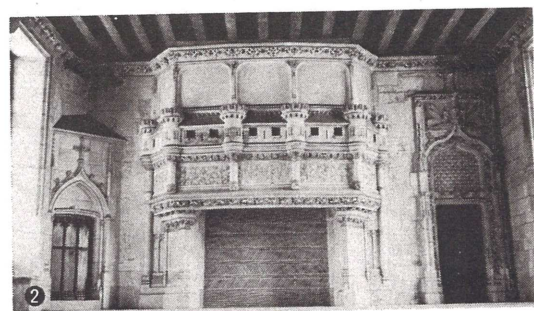
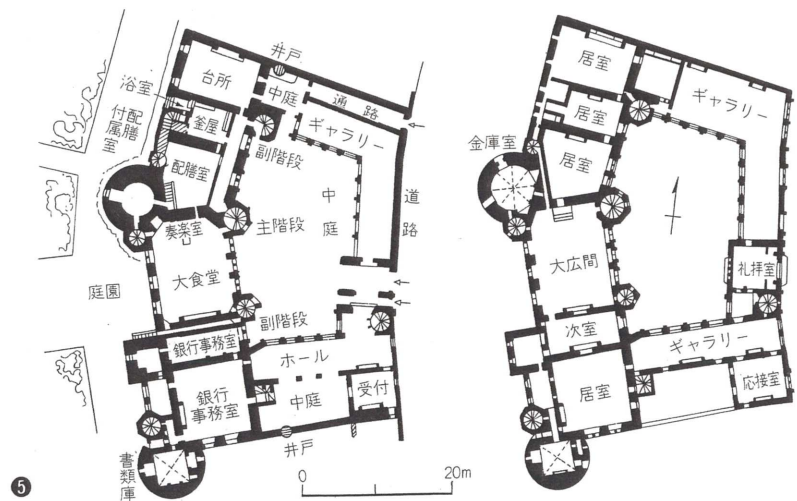
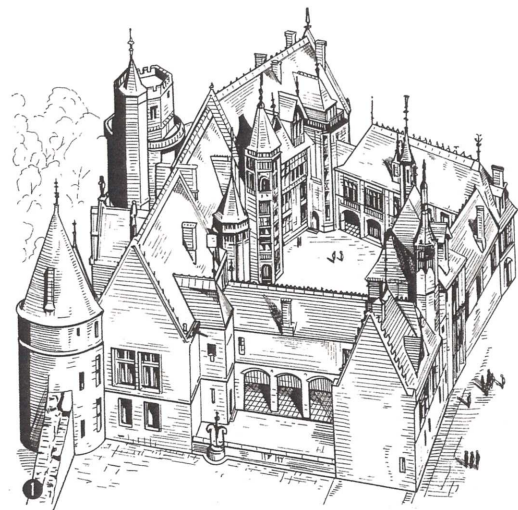
## 29-5, 6

**聖母昇天大聖堂, ウラディミール, ソ連, 1158~60年** Cathedral of Assumption (Uspensky sobor), Vladimir 国力回復に伴ってビザンチンは東欧のスラブ民族の教化を積極的に推進し、これに伴ってその教会堂建築は東欧諸国へ伝えられた。ロシアではキエフ大公が10世紀末にキリスト教に改宗し、内接十字式教会堂を原型として受け入れた。そのほかの東欧諸国と異なりロシアは内接十字式だけを原型として独自の教会堂を形成し、その後はビザンチン建築から影響を受けなかったと言われる。3廊式で室内に4基のピアを置き、その上にドームをあげたもの、その三方に側廊・ナルテクスをめぐるした5廊式、ナルテクスを取り囲んで室内に6基のピアを建てたものなどが11世紀に作られたが、いずれも内接十字式を原型とする。東端には1~3アプスを張り出し、西端のベイにはトリビューンを設ける。通常ドームは堂中央に1基作るが、大規模な教会堂ではしばしば中央のドームをめぐる2~4個の小ドームを設けてピラミッド状に構成する。室内は昇高性が強く、内装にはビザンチンに倣ってフレスコ、モザイクを用いる。ドームのドラムには多数の採光窓を作るが、外壁には小数の窓を開くだけで、平らでマッシブな外観をとる。キエフに始まったロシアの教会堂建築は12世紀のウラディミールに引き継がれ、ドームを含めて軒先に半円形の破風や盲アーチをめぐるし、外壁には柱型・付け柱・盲アーケードを用いて垂直・水平方向の分節を明瞭にするとともに彫刻装飾を加えるなど形態的に洗練されていった。200年におよぶモンゴルの支配を脱してモスクワが中心となって再び建築活動が活発になったとき、その基礎となったのはウラディミールで完成された教会堂であった。ウラディミール大聖堂は1158~60年に室内に6ピアを建て西端にトリビューン、堂中央にドームを一つ持つ3廊式として創建された。1185年の火災後、その外側の三方に側廊を増築し、東側のアプスを取り壊して拡大し、側廊の上に4基のドームを増設した(1185~89)。ロシアにおける正教会本山をキエフからここへ移すことを意図して作られた大教会堂だが、それが実現したのは13世紀末から1326年までで、その後、本山はモスクワに移った。モスクワにおける初期の大教会堂であるクレムリンの聖母昇天大聖堂(1475~79)はこれを原型としてイタリアの建築家フィオラヴァンティ(A. Fioravanti, 1415ごろ~85/86)が設計したものである。

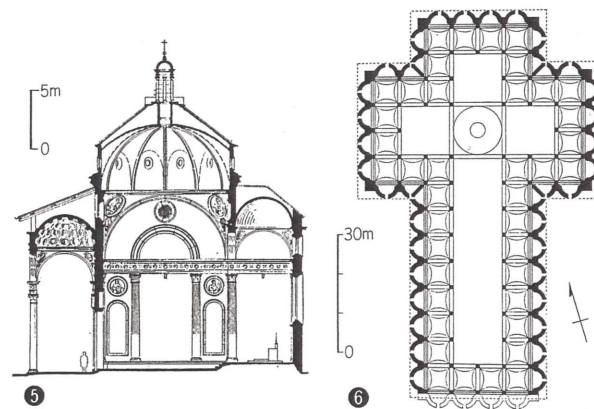
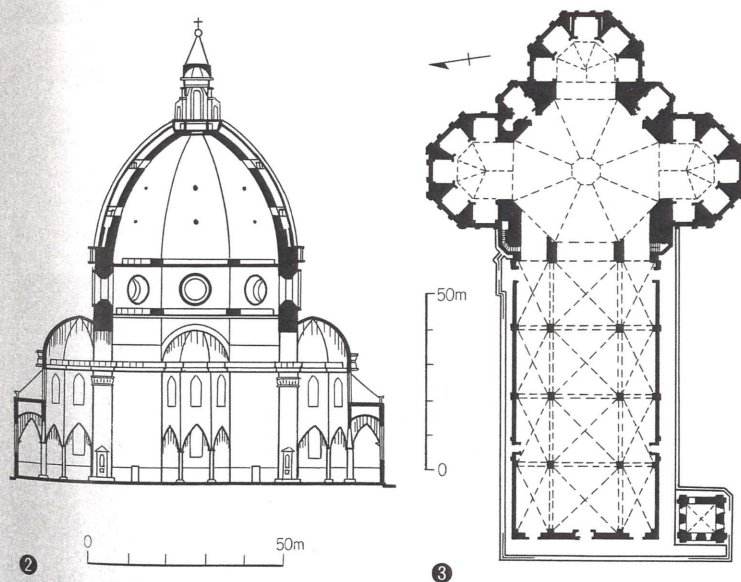
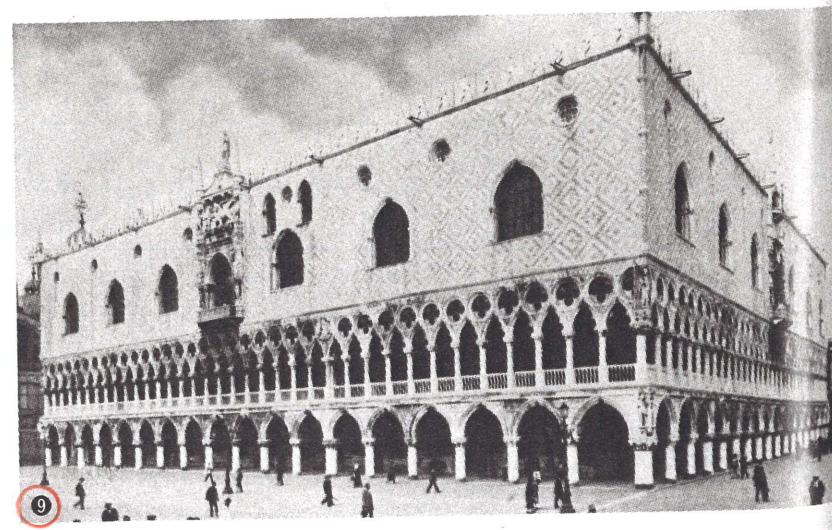
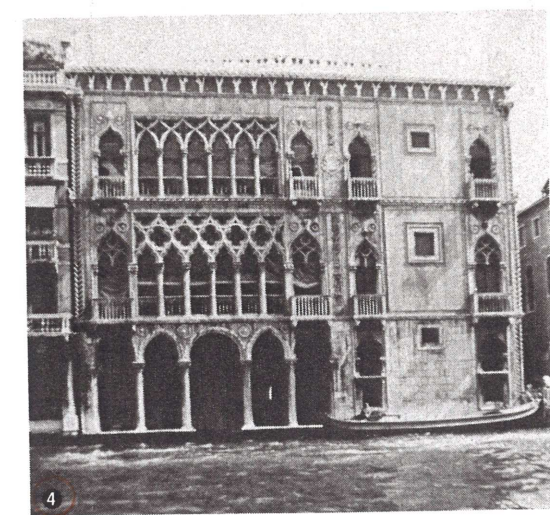
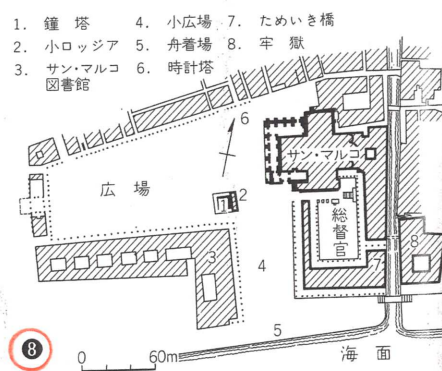
- H. Faesen and V. Ivanev, Early Russian Architecture, London, 1975, p. 350-355

## 29-7~10

**ホシオス・ルカス, ギリシア, 10世紀中ごろおよび11世紀初め** Hosios Lukas この建物は隠修士聖ルカス(896~946または49)の墓所に951年開設された修道院の付属教会堂で、聖者にささげられ、クリプトにその墓所があるカトリコン Katholikon(→9)は



- 1,2,5 ジャック・クェール邸, ブールジュ, フランス。1443~51
- 3 マルパリュ街, ルアン, フランス。15~16世紀
- 4 カ・ドロ, ヴェネチア, イタリア。1424~37ごろ
- 6,7 クリュニーの町家, フランス。12世紀
- 8,9 総督宮 (14~15世紀) とサン・マルコ広場, ヴェネチア, イタリア



- 1,2,3 フィレンツェ大聖堂。1296起工。ドームはフィリッポ・ブルネルレスキ (1377~1446) により1418設計, 1420~36建造。頂塔は1461完成。正面は1887完成。左方の塔はジョットー設計の鐘塔, 1334~87
- 4 オスバダレ・デッリ・インノチェンティ (捨子保育院), フィレンツェ。ブルネルレスキ, 1419設計, 1421~45
- 5 パッツィ家礼拝堂, サンタ・クロッチェ聖堂, フィレンツェ。ブルネルレスキ, 1430~61。断面図
- 6,7 サント・スピリト聖堂, フィレンツェ。ブルネルレスキ, 1436~82。平面図と身廊部



- H. Julien, Les maisons à pans de bois de Rouen, Monuments Historiques de la France, 1961, p. 59-66

## 50-4

**カ・ドロ, ヴェネチア, 1424~37年ごろ** Ca d'Oro, Venezia 石造壁面を曲線・反曲線のトレイサリーや繊細なコロネードで覆い隠して、軽快に見せようとする後期ゴシックの装飾性は、モザイクやタイルやフレスコで壁体を非物質化させるビザンチンやイスラム芸術の装飾性と結合してヴェネチアン・ゴシックを作り出した。この様式の代表的な作品は運河に面して建てられた邸宅である。中世の都市は城壁で守られていたが、市内の邸宅でも道路側は一般に自衛のため開口部の少ない閉鎖的な壁面とし、中庭に面した部分だけを開放的にした。城壁の代わりに水で守られていたヴェネチアでは運河が主要な幹線道路で、邸宅は正面を運河に向けて開放的に作られた。15世紀に建てられたこれらの邸宅では総督宮で用いたトレイサリー状の交切アーチを持つ列柱廊が好んで使用され、華やかな景観を運河に沿って展開している。カ・ドロは大運河のほぼ中央にあり、11~17世紀に7人の総督を出したコンタリーニ家の邸宅で、ミラノの工匠により1424~37年ごろ作られた点と装飾が極めて豪華な点が特色とされる。平面はヴェネチアのそのほかの邸宅と大差なく、1階に倉庫と事務室、2~3階に広間と居室を置く、古風な1階のアーケードは前身建物から転用したものと言われる。1~3階の列柱廊は当初、金色に塗られて一段と浮き出し、右端の壁面と著しい対比を形成していた。

- P. Lauritzen and A. Zielcke, Palaces of Venice, London, 1978, p. 93-102
- E. Arslan, Gothic Architecture in Venice, London, 1972, p. 233- 244

## 50-6,7

クリュニーの町家, 12世紀 Cluny 住宅建築では、一般に土地産の入手しやすい材料を使用するので、木材が豊富な地方では中世を通じて石造・煉瓦造は重要な公共建築や有力者の邸宅に限られ、一般の住宅は木造であった。修道院（→38-1,4）の門前町として発展したクリュニーの町では、良質の石材が入手しやすいので、一般の住宅にも石造が多い。この町家（12世紀）の敷地は、モンパジェ（→49-8）の場合と同じく約7.5m×20mで、道路側に店・仕事場、2階に居間・客間・寝室兼用の主室をとり、3階は改造されているが、倉庫・使用人寝室に使用されていた。台所は井戸・便所のある小さな中庭を隔てた別棟とし、その2階を家族用の寝室とする。イギリスでは、中世末まで暖房には炉が好んで用いられているが、大陸では一般に11世紀以後はローマ式の壁付暖炉が用いられ、時には床暖房（例：ザンクト・ガレン修道院古図、→32-4, ジャック・クエール邸, 1,2,5）も見られる。

- Viollet-le-Duc, Dictionnaire raisonnée de l'architecture française, 第6巻, Paris, 1868, p. 222-224

## 50-8,9

**サン・マルコ広場と総督宮, ヴェネチア, 11~16世紀および14~15世紀** Piazza di San Marco and Palazzo Ducale, Venezia 東にサン・マルコ大聖堂（→29-1~3）、西・南・北に官庁建物（16~19世紀初期）を配置した大広場と、東側と西側に図書館（→56-1）と総督宮、南側に大運河をひかえた小広場で形成されたサン・マルコ広場は、欧州の最も美しいモニュメンタルな広場である。総督宮はサン・マルコ大聖堂の南側に約50m×35mの中庭の三方囲んで作られた公共建築で、共和国の総督官邸・政庁・法廷を収容する。サン・マルコ運河に面する南正面は1340~1404年に作られた。小広場に面する西正面は既存の古い法廷を取り壊し、南正面に倣って1424~38年に、小運河側正面は1483~98年に作られた。中庭側正面は1485~1550年ごろで、ルネサンスへの過渡的な様式である。総督宮は強大な海軍力に守られた大貿易国としてのヴェネチアを象徴する壮大華麗な建物で、東西各地のモチーフを組み合わせた独特の華やかで幻想的な後期ゴシッ

ク——ヴェネチアン・ゴシックの先駆的作品である。1階のアーケードを支持する円柱は3段のベース上に作られていたが、数次にわたる地盤のかさあげのため、円柱が床から直接立ち上がる形となり、当初のプロポーションを失ってしまった。2階のギャラリーは細い円柱の上に、頂点に反曲線のある尖頭アーチをのせ、二つのアーチ間のティンバナムに四葉形を持つ円窓を置く。トレイサリーを原形とするレースのような構造体の上に、小数の窓しかない大きな壁体が築かれているのだが、その壁面は白色と淡紅色の大理石で縞文様に外装されているので、繊細な2階のアーケードを押しつぶすような印象を与えない。またロマネスクのように人物を刻んだ柱頭、ローマ建築を思わせるメダイオン、中近東から取材した軒先飾りなど、時代・地域を限定せず自由にモチーフを組み合わせながら、混乱した印象や不統一な感じを与えない。

- E. R. Trincanato, G. Mariacher, Il Palazzo Ducale di Venezia, Firenze, 1967
- G. Samonà, etc., Piazza San Marco, Padova, 1970

## 51-1,2,3

フィレンツェ大聖堂, サンタ・マリア・デル・フィオーレ, 1296年起工, ドームは1418年設計, 1420~36年建造, 頂塔は1461年完成, 正面は1887年完成, ジョットーの塔は1334~87年 Duomo (S. Maria del Fiore), Firenze (Arnolfo di Cambio; Giotto; Francesco Talenti; Giovanni di Lapo; Filippo Brunelleschi) 1296年, アルノルフォ(1232~1302)によって起工されたゴシックの大聖堂であるが、この平面を現在の規模に拡大したのは、1357年に主任建築家となったタレンティであるといわれる。ジョットーの鐘塔は、それより先、1334年にすでに建てられ始めていた。ドラムの上のの内径43mの八角ドームは、1418年の競技設計でブルネルレスキ(1377~1446)の案が採用され、ジョヴァンニ・ディ・ラボ設計のドラムが完成した1420年8月から1436年にかけて、中世的な大規模な足場や型枠を用いることなく建造され、1436年12月31日に奉獻された。ドームは二重殻で、内殻と外殻は、8本の大リブと16本の小リブで接合され、ドームの基部は、太さ30cm角、長さ3mの木材60本を帯鉄とボルトで結合したリングで締め付けてある。ドーム下部の3.5mほどは鉄のクランプでつないだ石灰岩で積んであるが、それより上のリブ間の内外殻は煉瓦造で、その間に5本の石材の層を、クランプでつないで挿入している。ドームの外部は、瓦でふき、リブの部分には大理石板をかぶせてある。1432年のランタンの競技設計でも、ブルネルレスキが勝ち、その模型によって、彼の死後、1446年3月に起工、1461年に完成した。地上55mの高さから、120mの天空にまでそびえ立つ推定重量2万5,000tのこの大ドームは、単に古今の最も壮大な建築作品の一つに数えられるばかりでなく、15世紀フィレンツェの富強と意欲、新しい設計理念、創造的な建築家の出現を劇的に示している点が注目される。なお、この大聖堂の西正面の大理石張りは、1875~87年によりやく完成されたものであり、ドームとドラムの境界に付くギャラリーもまだ未完成の部分がある。

- Zaalman, H., Filippo Brunelleschi; The Cupola of Santa Maria del Fiore, London, 1980
- Klotz, H., Die Frühwerke Brunelleschis und die Mittelalterliche Tradition, Berlin, 1970

## 51-4

オスペダーレ・デッリ・インノチェンティ, フィレンツェ, 1419年設計, 1421~45年建造 Ospedale degli Innocenti (Foundling Hospital), Firenze (Filippo Brunelleschi) スパンに対して、著しく細い柱、緩やかに架かる半円アーチ、滑らかなペンデンティヴ・ヴォールト天井によって形づくられた軽快なロジャアと、それに支えられた上部の平坦なスタッコ仕上げの壁体との対照で、鈍重なイタリア・ゴシックの世界に革命的な明るさと優雅をもたらした作品である。このロジャア部分は1421~24年に建造され、コリント式円柱、半円アーチ、エンタブラチュア、ベディメントが、初めて使われたので、最初のルネサンス建築といわれた。私生児の捨児の多かったルネサンス時代の慈善施設である。ロジャアのヴォールトはペンデンティヴ型で、露出した鉄のタイ・バーが用いられて、ロジャアを安定させているが、大聖堂のドームの構法にも見られたように、造型的意図を達成するために、比較的目立たないところに構造上の仕掛けを工夫することは、以後近世建築の大きな特色となり、それによって建築空間の自由度は飛躍的に増大した。このロジャアの構成が建物正面にそのまま模倣されることはまれであったが、パラッツォの中庭にはよく応用された。スバンドレルにはアンドレア・デッラ・ロbbiea作のむつきに包まれた赤ん坊の彩色テラコッタの円板装飾が付けられている。

- Argan, G. C., Brunelleschi, Verona, 1955 (浅井朋子訳「ブルネルレスキ」鹿島出版会)
- Sanpaolesi, P., Brunelleschi, Milano, 1962
- Luporini, E., Brunelleschi, Milano, 1964
- Filippo Brunelleschi 1377-1446, La naissance de l'architecture moderne, L'Equerre, 1978
- Battisti, E., Brunelleschi; The Complete Work, London, 1981

## 51-5

パッツィ家礼拝堂, フィレンツェ, 1430~61年 Cappella dei Pazzi, S. Croce, Firenze (Filippo Brunelleschi) フィレンツェの有力者アンドレア・パッツィによって計画された修道士の僧会堂とパッツィ家の墓廟を兼ねる建物で、1430年にブルネルレスキが建築家に指名された。サンタ・クロッチェ聖堂のクロイスターに立ち、ペンデンティヴ・ドームを架けた矩形の空間と正方形の内陣と円筒ヴォールトのポーチコから成り、内部は、サン・ロレンツォ聖堂の聖器室と同じく、オーダーやアーチは灰青色、壁は純白という簡素で明晰な構成で、彩色テラコッタのメダイオンが装飾のアクセントとなっている。中央のリブ付きのドームは、リブのあいだに桶型のヴォールトを架け並べて、円筒状の周壁からも採光しており、形態も構造も独創的なものである。ポーチコは、彩色テラコッタの桶型ヴォールトで、6本の円柱で支えられた石張りのパネルの中央部をアーチ形に切りとり、この部分に小さいペンデンティヴ・ドームを設けている。このポーチコ正面のモチーフは、旧サン・ピエトロの身廊部から、またフリーズの文様は、ローマ時代の棺から採られているといわれる。ブルネルレスキ作品のビザンチン・イスラム的要素とスタッコの活用をよく示す実例である。内部は1444年に完成、ドームは1461年に完成した。

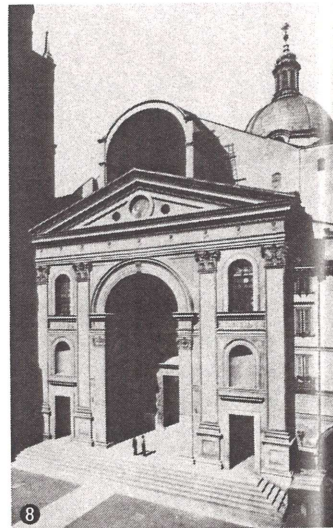
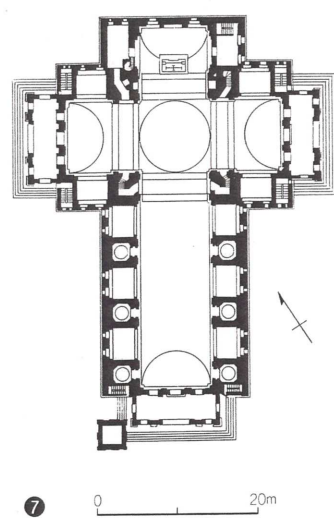
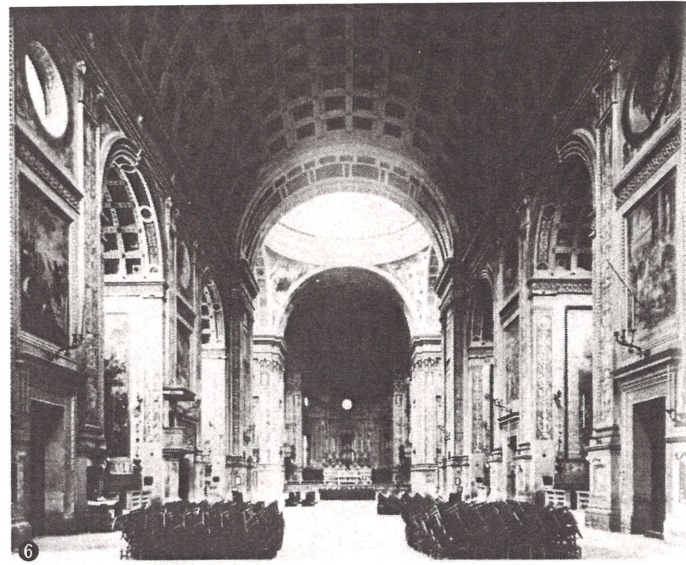
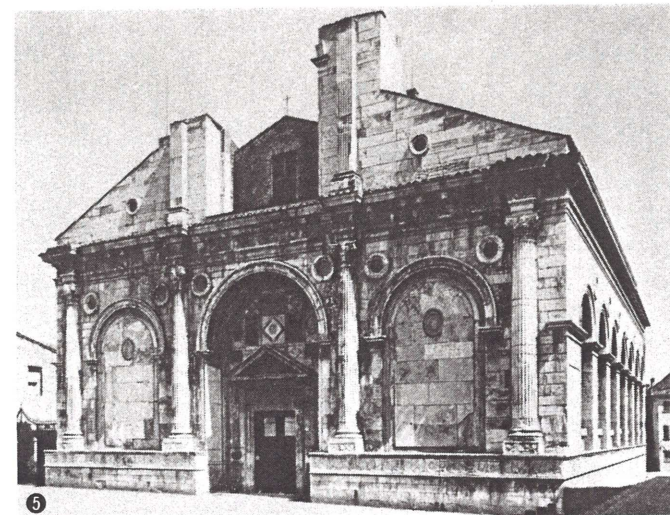
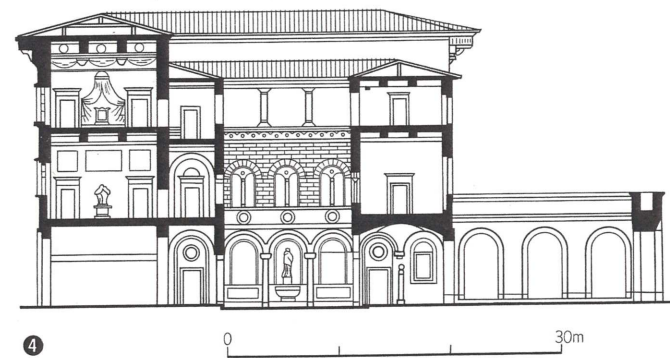
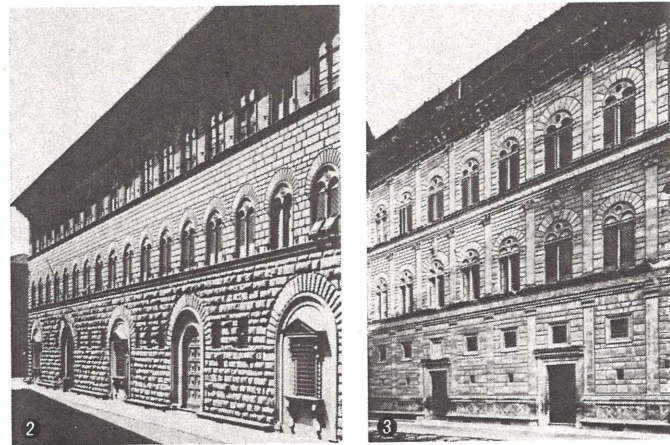
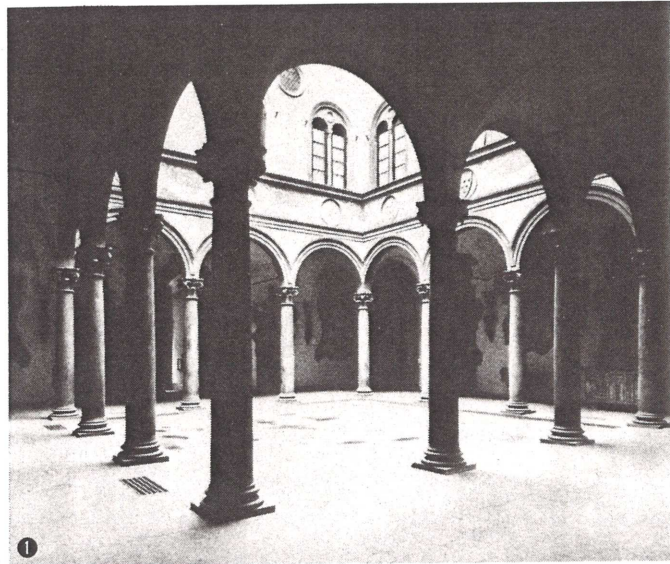
## 51-6,7

サント・スピリト聖堂, フィレンツェ, 1436年設計, 1482年ごろ完成 S. Spirito, Firenze (Filippo Brunelleschi) サン・ロレンツォ聖堂(1421~1446)に続くブルネルレスキの第2の聖堂建築で、1436年ごろに設計されたが、実際に建造が進捗したのは1445年以降で、82年ごろ完成した。しかし、この聖堂はブルネルレスキの意図をよりよく示したもので、側廊の幅を基準とし、一貫した1:2の比例で内部空間を構成している。サン・ロレンツォでは、初期キリスト教のバシリカの平面を用いたが、ここでは、より中世的なラテン十字平面を採り、両袖廊と内陣を同じ大きさにして集中堂的な交差部をつくるが、他方、側廊を袖廊や内陣にも一周させ、また壁には同一のニッチを繰り返すことによって、交差部と身廊部を一体化している。側廊にはペンデンティヴ・ヴォールト、交差部にもペンデンティヴ・ドームを架けているが、身廊、袖廊、内陣は平天井である。単純な幾何学的な論理で整然と統制された空間に、ルネサンス的のヒューマニズム、すなわち人間の意志による統御を見るべきである。

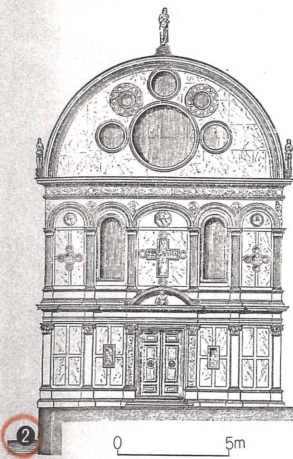
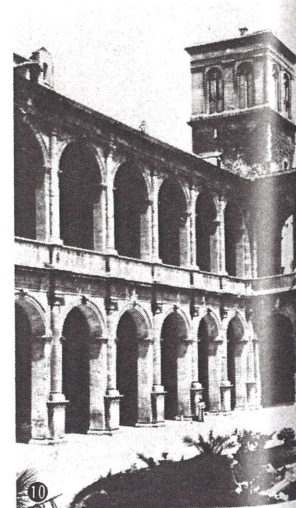
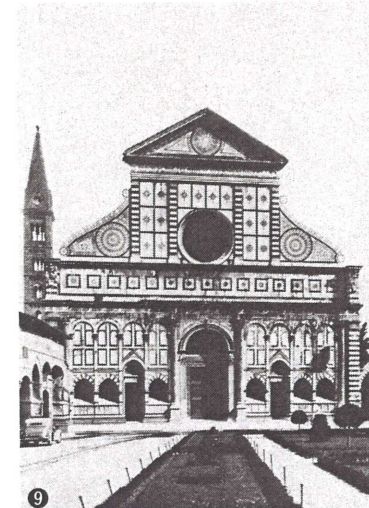
## 52-1,2,4

パラッツォ・メディチ, フィレンツェ, 1444~59年。1680年増築 Palazzo Medici-Riccardi, Firenze (Michelozzo di Bartolommeo) 不断の政情不安のため、イスラム系の中庭式多層城館の形式をとり、中庭には開放的であるが、外には閉鎖的で、ルスタカ仕上げの外壁の強固さを示感するトスカナの伝統的な邸宅建築に、古典様式のルールを適用した最も早い例である。豪商メディチ家の邸宅として1444~59年に建てられ、3階建て、軒高24.8mに達する。ピアノ・ノビレ(主室階)は2階にあり、広い緩勾配の階段で導かれる。中庭1階のロジャアは、ブルネルレスキの捨子保育園のポーチコを模して、優雅をきわめている。外壁は3層に区分されて、上層にいくに従って、壁仕上げをおだやかにし、あらわなオーダーは用いないが、軒高に対して比例をとった豊かな大コーニスで飾っている。1階のアーチは、のちにふさがれて、ミケランジェロ設計の窓が取り付けられた。また、この建物は、はじめ1階の入口三分を含む10ベイの長さであったが、1659年にこの建物を買いとったリッカルディ家により、1680年に拡張されて、現状のごとく正面入口が五つある17ベイの建物となった。この継ぎ目は、滑らかな3階壁面上にはっきりと認められる。コジモ・デ・メディチは、はじめブルネルレスキに設計を依頼したが、豪華にすぎるとい理由で、これをしりぞけ、ミケロッツォ(1396~1472)のより質素な案をとったと伝えられている。

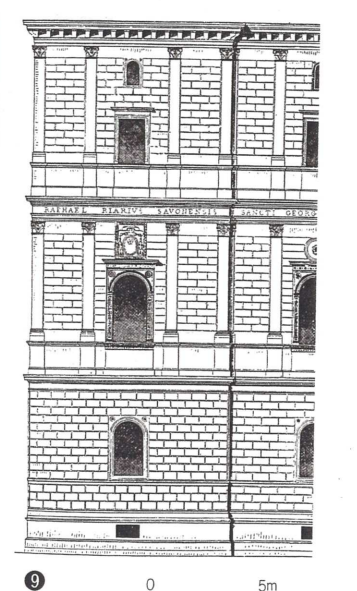
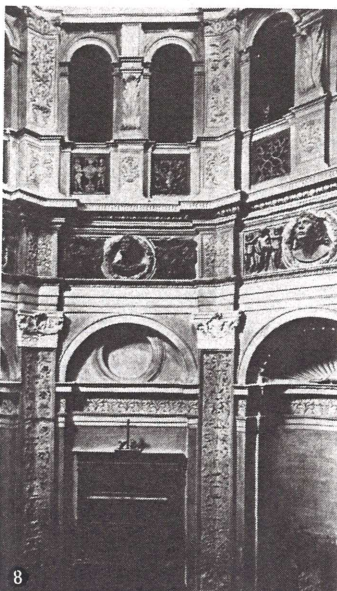
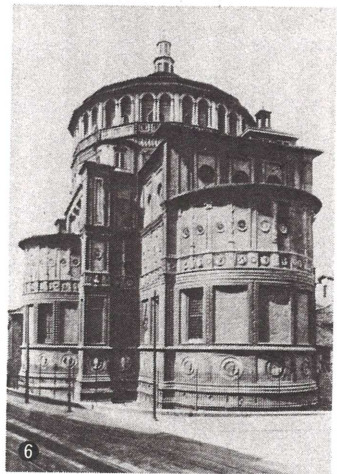
- Morisani, O., Michelozzo architetto, Torino, 1951



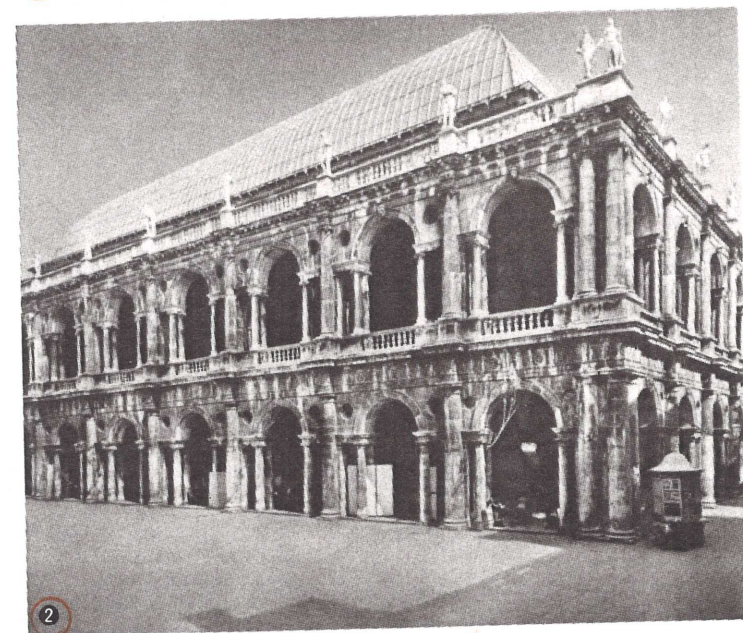
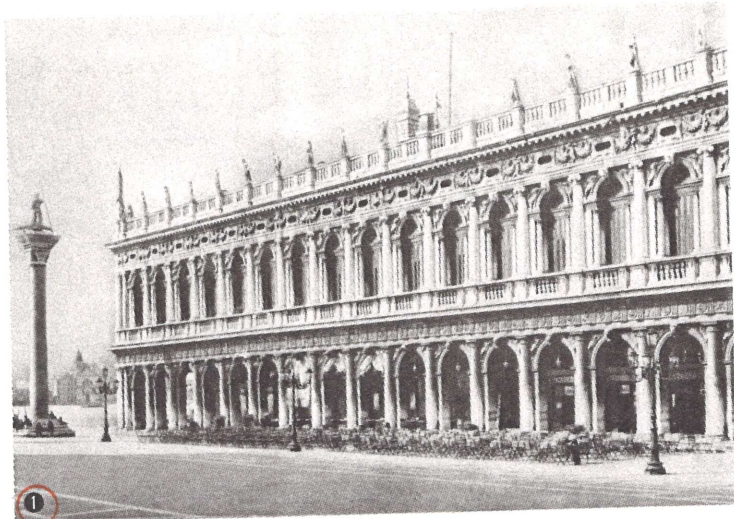
- 1,2,4 パラッツォ・メディチ, フィレンツェ。ミケロツォ(1396~1472), 1444~59。中庭, 外観, 断面
- 3 パラッツォ・ルチェルライ, フィレンツェ。レオン・バッティスタ・アルベルティ(1404~72), 1446~51。正面部分
- 5 サン・フランチェスコ, リミニ。アルベルティ。1450~68
- 6,7,8 サンタンドレア聖堂, マントヴァ。アルベルティ, 1471~1512。内部, 原案平面図, 正面
- 9 サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂正面, フィレンツェ。アルベルティ, 1443~70
- 10 パラッツォ・ヴェネチア中庭, ローマ。アルベルティ?, 1468



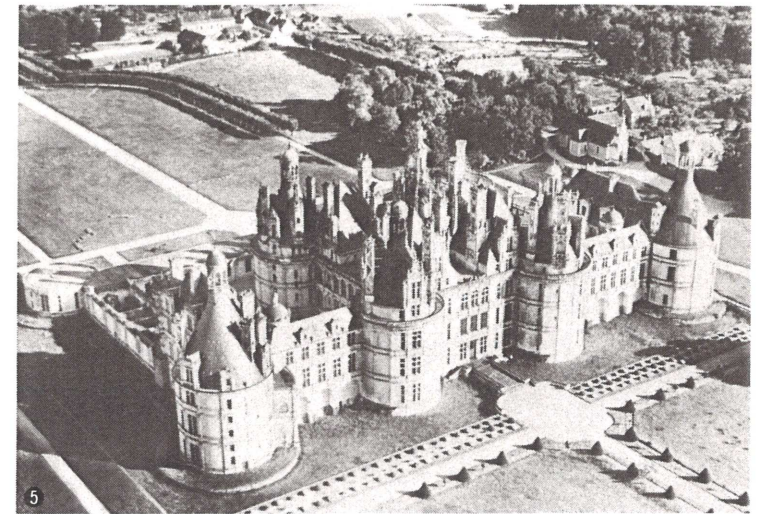
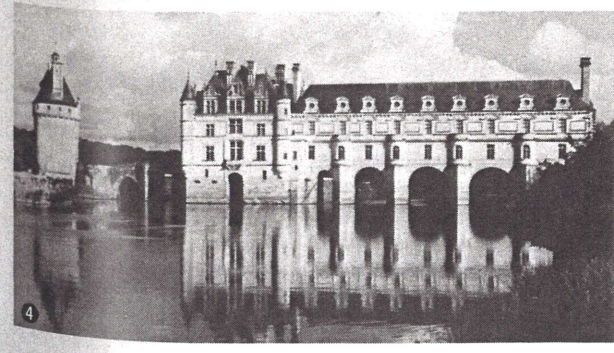
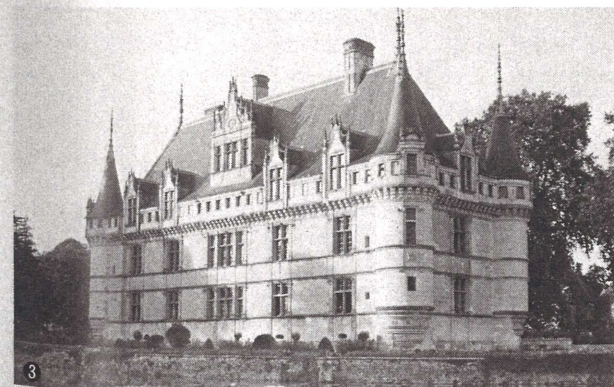
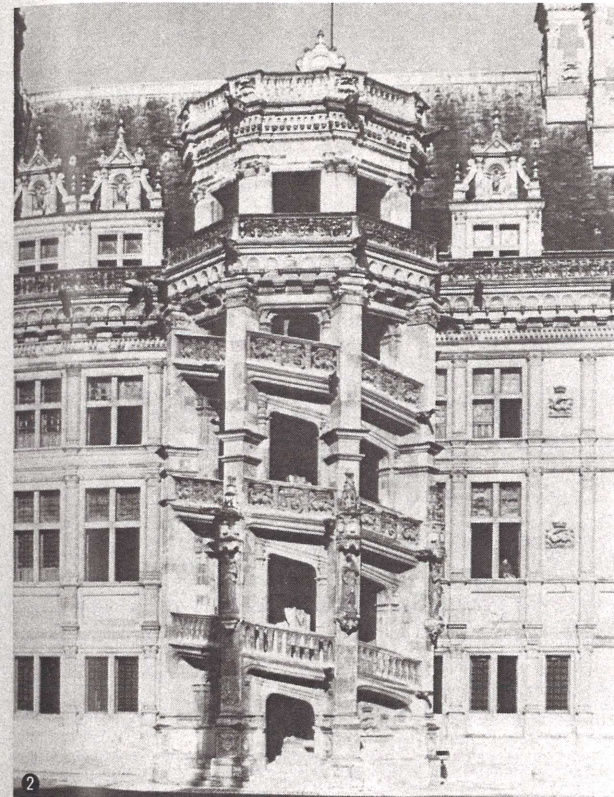
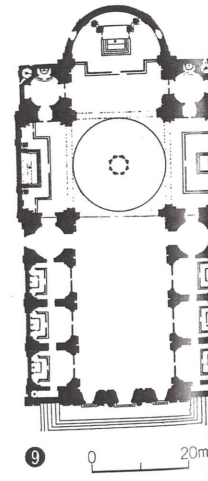
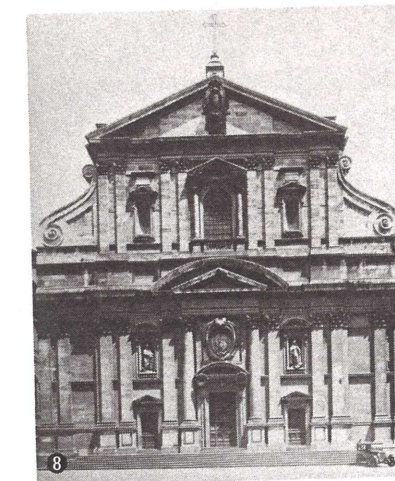
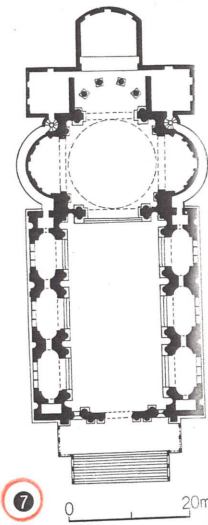
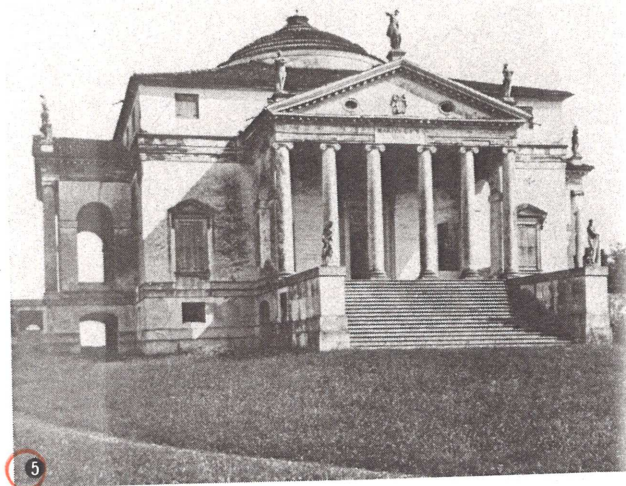
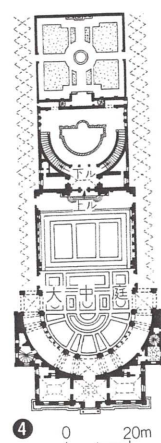
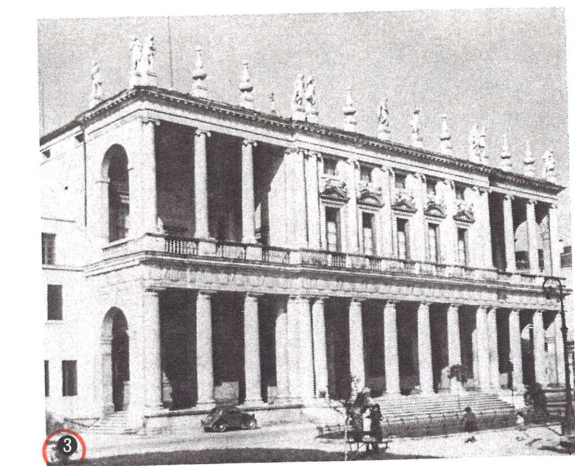
- 1 パラッツォ・ヴェンドラミン, ヴェネチア。1481起工
- 2 サンタ・マリア・デイ・ミラコリ聖堂, ヴェネチア。ピエトロ・ロンバルド(1435~1515), 1489ごろ
- 3 チェルトーサ正面, バヴィア。1473起工
- 4 オスベダーレ・マッジョレ, ミラノ。1456~65
- 5,8 サン・サチーロ聖堂内陣部と聖器室, ミラノ。ドナト・ブラマンテ(1444~1514), 1482~86ごろ
- 6,7 サンタ・マリア・デルレ・グラチエ聖堂東端部, ミラノ。ブラマンテ, 1485ごろ~97。外観と内部
- 9 パラッツォ・デッラ・カンチェルレリア, ローマ。1486~98







- 1 サン・マルコ図書館, ヴェネチア。サンソヴィーノ, 1537~91
- 2 バジリカ(パラッツォ・デッラ・ラジョーネ), ヴィチエンツァ。アンドレア・パラディオ (1508~80), 1549起工, 1614完成
- 3 パラッツォ・キエリカーティ, ヴィチエンツァ。パラディオ, 1550設計, 1580ごろ完成
- 4 ヴィラ・ジュリア, ローマ。ヴィニョーラその他, 1551起工
- 5 ヴィラ・ロトンダ, ヴィチエンツァ。パラディオ, 1567起工
- 6,7 イル・レデントーレ聖堂。ヴェネチア。パラディオ, 1576~92
- 8,9,10 イル・ジェズ聖堂, ローマ。ジャコモ・パロッツィ・ダ・ヴィニョーラ (1507~73) およびデッラ・ポルタ, 1568~84



- 1 パルマノヴァ都市計画。ヴィンチェンツォ・スカモッツィ (1552~1616), 1593設計
- 2 ブロワの城館, フランソワ I 世の翼屋と大階段, 1515~25
- 3 アゼール・リドーの城館。ジル・ペルトロー, 1518~25
- 4 シュノンソーの城館。第1期, 1515~22。第2期, 1556~59 (ド・ロルム)。第3期 1576~81 (ピュラン)
- 5 シャンボールの城館。原案はドメニコ・ダ・コルトナ, 1519起工
- 6,7 フォンテブローの城館, フランソワ I 世のギャラリーとアンリ II 世のギャラリー。前者はイル・ロツン, 1530年代。後者はフィリペール・ド・ロルム (1510ごろ~70), 1548~56





langelo Buonarroti) 法王ユリウス二世 (1503~13) は、1503年に即位すると、直ちにヴァチカン宮殿の大拡張工事を始めた。ベルヴェデーレの中庭は、幅 75m、長さ 320m という長大なもので、ブラマンテの案では、南から北へと階段状の大テラスが上昇し、モニュメンタルな大階段によって北端のテラスに達する。そこでは、左右は1階のアーケイド、正面は2階建の古美術館で、中央に座席のある半円形のエクセドラが設けられるはずであった。このアイデアは、ユリウス二世の帝政ローマ再現の野心に呼応するローマ的な構想で、バロック的構成の先駆とも言えよう。この工事は、急がされたために施工が不良で、ブラマンテの死後やがて未完成のまま設計変更され、中庭そのものも建物で分割され、大ニッチのある北中庭は現在ジャルディーノ・デッラ・ピーニャと呼ばれている。この大ニッチも、ブラマンテ案をピロ・リゴリオが改作したもので、半ドームとベルヴェデーレが付加され、階段はミケランジェロの設計である。

#### 54-4

**ブラマンテのサン・ピエトロ計画案、1506年** S. Pietro, Roma (Donato Bramante) 法王ユリウス2世は、大聖堂新築のため、古いサン・ピエトロのバシリカ式聖堂(→25-1)を破壊して敷地とし、競技設計によって、ブラマンテが指名され、1506年、その基礎石が置かれた。ブラマンテの案は、コンスタンティヌスのバシリカ(マクセンティウスのバシリカ、また「平和の神殿」とも呼ばれた)にパンテオンのドームを架けるという構想で、ギリシヤ十字形平面に半球形の大ドーム(パンテオンのドームと同大)を架け、4個の小ドーム、四隅の塔で囲んだもので、当時としては壁体の著しい彫塑性を示した美しい平面であったが、大ドームを支える柱とコーニスの高さまでの壁が立てられたのみで中絶し、しかも基礎が不良なうえ柱が細すぎたため、まもなく亀裂を生じてきた。ブラマンテのドームは、パンテオン型の半球ドームを列柱付きのドラムの上にのせた単殻のもので、頂部に小ドーム付きのランタンを付けてあった。ブラマンテの工事の失敗によって、サン・ピエトロの工事は一時中絶という形になった(→55-10)。

#### 54-5

**メディチ家礼拝堂、フィレンツェ、1521~34年** Cappella Medicea (Sagrestia Nuova), S. Lorenzo, Firenze (Michelangelo Buonarroti) ブルネレスキによって設計されたサン・ロレンツォ聖堂の古い聖器室(1421~34)と一対を成すもので、約12m角の室に小ドームを架けた凹所が付き、そこに祭壇がある。イストリア産の黒石、白大理石、および煉瓦下地のスタッコ壁で構成され、各種の建築的要素は極めて彫刻装飾的に取り扱われ、開かない窓、その下に押しつぶされた戸口、切れたペディメント、切り離されたコーニスなど、盛期ルネサンスの法則から逸脱しているが、しかも、それはそれなりに完全な比例と調和をもたらし、ヨーロッパにはまれな、優れた茶室にのみ見られるような緊迫した「さび」のある空間をつくり出している。右手の壁には、ジュリアノ・デ・メディチの坐像と石棺の上の夜と昼の像、左手にはロレンツォ・デ・メディチの坐像と夕べと暁の像がある。ミケランジェロ(1475~1564)の最初の建築作品であるが、建築を彫刻作品と同じ程度に作者の個性的表現の手段としてしまう彼の力量と、建築をバロックの様相に誘導してゆく直前の、異様に静止した彼の様式を示すものとして重要な作品である。

- Ackerman, J. S., The Architecture of Michelangelo, London, 1964 (中森義宗訳「ミケランジェロの建築」彰国社)
- Michelangelo, artista-pensatore-scrittore, 2 vols., Novara, 1965; New York, 1965
- Tolnay, C. de, The Medici Chapel, Princeton, 1948

#### 54-6

**ロレンツォ図書館前室、フィレンツェ、1521~34年** Biblioteca Laurenziana, S. Lorenzo, Firenze (Michelangelo Buonarroti; Giorgio Vasari) サン・ロレンツォ聖堂付属のメディチ家の蔵書館で、図

書館そのものは幅 10.4m、奥行 44m という細長い部屋であるのに対し、この前室は、ほぼ 10m 角の広さで、極めて天井が高く、井戸のように深い異様な部屋である。開かない窓、支えない持送り、壁にめりこんだ柱など、メディチ家礼拝堂よりも、さらに著しい法則無視を示しているが、それにもかかわらず、かえって緊張しきった無類の独創的空間となっていることに注目すべきである。煉瓦造の壁体の上に灰黒色の建築的部材と白色のスタッコ壁という2色だけの対照でデザインされ、その印象は、底の知れない無気味な空虚に徹していて、踏み込んだ人を佇立沈黙させてしまう。1534年以降、工事はヴァザーリ(1511~74)に受け継がれ、黒大理石現階段は、彼が1559年以降ミケランジェロ案を改変して取り付けたものである。

- Wittkower, R., Michelangelo's Biblioteca Laurenziana, Art Bulletin, XVI, 1934

#### 54-7

**ラファエルロの家、1510~12年ごろ** Casa Raffaello (Palazzo Caprini), Roma (Donato Bramante) ブラマンテが画家ラファエルロ・サンチョ(1483~1520)のために設計した邸宅で、年代は不明だが1510~12年ごろの建造と見られている。盛期ルネサンス様式の邸宅正面の一典型で、その特色は、ルスティカ仕上げの基壇上の1階の上に、柱台と勾欄、一対にした半円柱の列、ドリス式のエンタブラチュアを配し、2階開口部の周囲にエディクラの装飾を付けたことである。1階の開口部も、中央のみがこの邸宅の出入口で、ほかは古代ローマ風の中2階付き店舗の形式になっている。この家はヴァチカンの近くのアレクサンドリーナ通りにおいてパラッツォ・カプリーニと呼ばれていたが、1936年にムッソリーニがコンチリアツィオーネ通りをつくった際に破壊されてしまった。ラファエルロ自身も優れた建築家で、1515~20年ごろパラッツォ・ヴィドーニ・カッファレルリを設計建造しており、ブラマンテ様式に基づきながら、むしろブラマンテをしのぐ出来栄を示している。この形式の盛期ルネサンスのパラッツォが現在あまり残っていないのは、2階建形式であるためローマの都市事情に適合しなかったからであろう。パラッツォ・ヴィドーニ・カッファレルリも、その後3階部分が付加されている。

- Hofmann, T., Raphael in seiner Bedeutung als Architekt, Leipzig, 1908-11
- Shearman, J., Raphael as Architect, J. of R. S. A., CXVI, 1968

#### 55-1, 5, 6

**パラッツォ・ファルネーゼ、ローマ、1530~46年、3階および入口は1546年以降** Palazzo Farnese, Roma (Antonio da Sangallo il giovane; Michelangelo Buonarroti) 盛期ルネサンスを代表する邸宅建築。55m×73.5mの矩形平面で、主室は2階にある。広場に面する正面は、いわゆる無柱式の典型的なもので、ほぼ同高の3層に分かたれ、煉瓦壁をスタッコ仕上げし、隅石と窓まわりは、コロセウムから取ったトラヴァーチンを用いている。特に注目すべきは、窓まわりの扱いで、柱、梁、ペディメントなどの構造的要素を彫塑的に適用し、壁面の単調化を防ぐ手法を確立した。この邸宅の正面2階の中央の窓、3階部分、およびコーニスは、1546年以降、ミケランジェロが建造したものでしたがってサンガルロ(1483~1546)の手がけた1階と2階部分よりも、窓まわりの処理が、より特異でマニエリスム的になっている。ローマの数多いパラッツォ建築のなかでも、やはり群を抜いた力作であり、前面広場のゆとりのあるスペースがそれをさらに引き立てている。

- Giovannoni, G., Antonio da Sangallo il giovane, 2 vols., Roma, 1959

#### 55-2, 3, 4

**パラッツォ・マッシモ、ローマ、1535年起工** Palazzo Massimo, Roma (Badassale Peruzzi) ベルッツィ(1481~1536)は当時最も学識に富み、才能豊かな建築家の一人で、これは、すでに家屋が密集してきたローマの不規則な形の敷地に、ピエトロ・マッシモおよびアンジ

ェロ・マッシモという兄弟のために二つの優雅なソフィスティケイティドな邸宅を巧みに設計した好例である。これらのうち、東側のピエトロ・マッシモ邸は、湾曲した正面、開放的な玄関、立体的構成を持つ中庭を大きな特色とするが、1階の円柱やピラスターの配置、上階の単調な壁、2階のバルコニー、3階4階、中庭部分の窓とコーニスの処理などに、いわゆるマニエリスムの特色を典型的に示している。この邸宅は、ファルネーゼ邸のような豪毅な理想を追求するものではなく、都会的な女性的な洗練を迫ったものであり、そうした方向に沿っては、おどろくべき独創に満ちており、そつのない細部の設計に定評のある秀作である。

- Kent, W. W., The Life and Works of Baldassare Peruzzi of Siena, New York, 1925

#### 55-7

**ジュリオ・ロマーノ自邸、マントヴァ、1544年起工** Casa di Giulio Romano, Mantova (Giulio Romano) ロマーノ(1492~1546)はラファエルロの助手で1524年、マントヴァの君主、フェデリゴ・ゴンツァガ二世に招かれ、ゴンツァガ家の夏の離宮パラッツォ・デル・テ Palazzo del Té (1526~35)で、古典的法則や比例を自由に改変した豊富な手法を考案して、独自の様式を完成し、イタリアのみならず、アルプス以北にも大きな影響をおよぼした。自邸はロマーノ晩年の自邸で、彼の成熟した様式を代表し、かつマニエリスムの特色を最もよく示す作品の一つである。外壁は2層とも、特異なルスタカのボタン、1階の方形窓、半楕円形アーチの入口と、ぶつ切りになった蛇腹とそれに連続した入口上のペディメント、二重の枠で囲んだ2階窓、その枠と連続したペディメント、花飾りと丸窓つきのフリーズなど、古典のルールとは全くかけ離れた奔放な処理をしている。しかし、それらの総合効果は極めて落ち着いたもので、洗練度も高い。2階の窓まわりは、大理石とテラコッタを用い、入口の上部のニッチには、マーキュリーの像を飾っている。同じくマントヴァにあるパラッツォ・デル・テは、ゴンツァガ二世の夏の離宮で、正方形の中庭を囲む建物と、壁で囲まれた大庭園から成り、建物は庭園にロジャで接し、庭園の他端は半円形をなす列柱のスクリーンを通して遠景を展望する。中庭側はルスタカの壁、ピラスター、ニッチが力強く組み合わされ、各柱間でトライグリフが1枚ずつ下方にすべり落ちて窓となり、したがってアーキトレーヴもところどころ、ずれ落ちるといふ奇想が見られる。また庭園に面するロジャ部分の中央部は、古典モチーフの自由な省略や新鮮な比例によって、凝りに凝った中庭とは対照的な晴朗さを出すことに成功している。

- Hartt, F., Giulio Romano, New Haven, 1958
- Paccagnini, G., Il Palazzo del Té di Mantova, Milano, 1957

#### 55-8, 9

**カンピドリオの広場、ローマ、1536年ごろ設計、1547年起工、パラッツォ・デル・セナトーレは1592年起工、デイ・コンセルヴァトーリは1564~68年、カピトリノ美術館は1644~55年建造** Piazza del Campidoglio (The Capitol), Roma (Michelangelo Buonarroti; Girolamo Rainaldi) カピトリノ丘上の古代ローマの元老院の跡に、その再建を意図してつくられた壮大な広場計画で、台形広場と、アプローチとして大階段と、三つのパラッツォを対称的に配置する。しかし、ミケランジェロ自身が直接工事を管理したのはアプローチの大階段とパラッツォ・デル・セナトーレの大階段および広場の騎馬像だけである。中央のパラッツォ・デル・セナトーレ Palazzo del Senatore (1592~98)は、ミケランジェロの案に基づき、ジロラモ・ライナルディ(1570~1655)が建造し、古代ローマのタブラリウム的位置に建ち、右にパラッツォ・デイ・コンセルヴァトーリ Palazzo dei Conservatori (1564~68)、左にカピトリノ美術館 Museo Capitolino (1644~55、ライナルディ建造)があり、広場中央にはマルクス・アウレリウスの騎馬像が立つ。この像は1533年にすでに立てられていた。明瞭な軸線とク

ライマックスを持つバロック的な広場計画の最初のものであり、建物も大オーダーを初めて用いた画期的作品である。パラッツォ・デル・セナトーレは、狭い矩形の中庭を持つ不整形の建物であるが、古代のタブラリウムと同じように、両端部が前面に突出したポディウムの前面に左右から上昇する大階段を付け、その上の主要階と最上階にわたって、壁面上の薄い柱形の上に大オーダーのピラスターを適用する。2階建のコンセルヴァトーリと博物館では、1階前面をパネル天井のロジャとし、矩形断面のピアに、ベDESTALにのせた大オーダーのピラスターを適用し、ピアの両側に小円柱を独立して立てる。このような柱形の上にさらにピラスターを重ねる用い方は、パラッツォ・ファルネーゼの中庭側最上階(→55-5)に見られたように、ミケランジェロ独特のものである。

#### 55-10

**ミケランジェロのサン・ピエトロ計画案、ローマ 1546年** S. Pietro, Roma (Michelangelo Buonarroti) ブラマンテ案(→54-4)の停滞のち、ブラマンテは、その助手を務めていたベルツィイとともに、柱をより太く、壁をより厚く補強した第2案を作製したが、実施に至らなかった。新任の助手の1人ジュリアノ・ダ・サンガルロ Giuliano da Sangallo (1445~1516)は、教会側の要望にこたえて、長堂形式に転じ、ブラマンテの第2案を修正し、これに7廊3ベイの身廊部をつないだ案を示した(1514年ごろ)。また他の1人フラ・ジョコンド Fra Giocondo (1433ごろ~1515)は、ブラマンテの第2案の中心部を残すだけでなく、これをさらに三つ繰り返し並べて身廊部とし、四隅の塔をとって、交差部の北・西・南の腕に小塔2個ずつを立てるラテン十字の長堂とした(1514)。1514年にブラマンテは死に、後継者ラファエルロ Raffaello Sanzio (1483~1520)は、サンガルロ案を修正して、3廊5ベイの身廊部とした(1517年ごろ)。1516年、ラファエルロの助手となったジュリアノの甥アントニオ・ダ・サンガルロは、ブラマンテの建てた柱の補強を開始し始めたが、1520年に主任となったベルツィイは、1535年に死ぬまで、当時のイタリアの不穏情勢に妨げられて、ほとんど工事を進めることができなかった。後継者サンガルロは、ブラマンテの第2案にナルテクスとごく短いドーム付きの接続部を付けた案をつくり(1540年ごろ)、ブラマンテの柱の補強工事を終えた。1546年、後継者に指名されたミケランジェロは、サンガルロの案を一擲して、ブラマンテの整然として秩序ある第1案にもどり、その複雑さを大胆に整理して、面積を3/5に縮小した。それによって、ドームは相対的に重要性を増し、外壁は厚くなって、ミケランジェロ独自の逞しい有機的な彫塑性を示すようになった。また外部については、サンガルロ式の3層構成のオーダーを捨てて、アティックを持つ一層と見なし、総高33.8mのコリント式大オーダーを適用した。ミケランジェロは、初め粘土で模型をつくりあげ、それを木製模型に写しつくらせたと言われる。特に注目したいのは、実施されなかった大ポーチコで、高さ30mに近い独立円柱14本が立ち並ぶ壮观となるはずであった。

- Marchini, G., Giuliano da Sangallo, Firenze, 1942

#### 56-1

**サン・マルコ図書館、ヴェネチア 1537~91年** Libreria Vecchia S. Marco, Venezia (Jacopo Sansovino) サンソヴィーノ(1486~1570)は、1527年サン・マルコ修理のためヴェネチアに招かれ、ローマの盛期ルネサンスをこの地に導入した。この図書館は、その華やかな彫塑性によって、最も壮麗なルネサンス建築として知られ、またベルツィイのヴィラ・ファルネジナ(1508年起工)にならったオーダーの特異な用法によって著名であり、エンタブラチュアのせいはい、オーダーの柱高の1/3および1/2に達し、アーチのスバンドレルには人像をはめ、窓(小屋裏換気孔)を持った幅広いフリーズは、高浮彫りで豊かに飾られ、軒には彫像を立てたバラストレード、四隅にはオペリスクを配するというにぎやかさであるが、その用法は盛期ルネサン

スのルールを大幅に逸脱するものとは言えない。21ペイで全長84m、1階はヴォールトしたロτζアの背後に各柱間に店舗が並び、中央奥に階段があり、上階は右端から7ペイが図書館、次の3ペイがその前室となり、海に近い半分は2組の続き部屋に細分されている。サンソヴィーノは21ペイのうち、広場から16ペイしか建てることができず、残りの海に近い5ペイは、バラディオの弟子ヴィンチェンツォ・スカモツィが1588～91年に建てて完成した。なお、サンソヴィーノは、サン・マルコ広場のこの建物に近い場所に小さいが美しいロτζェッタ(1537～40)を建てている。

- Howard, D., Jacopo Sansovino, New Haven & London, 1975
- Piazza San Marco; l'architettura, la storia, le funzioni, Padova, 1970

## 56-2

**バジリカ(パラッツォ・デッラ・ラジョーネ), ヴィチェンツァ, 1549年起工, 1614年完成** Basilica (Palazzo della Ragione), Vicenza (Andrea Palladio) 1444年建造の市庁舎ホールに、ルネサンス様式のアーケイドを付加した裁判所の建物で、バラディオ(1508～80)はすでに1545年の競技設計に図面を提出当選しているが、実際に模型が承認されたのは1548年で、全体の完成は、1614年であった。アーケイドは、上下とも煉瓦造の交差ヴォールト天井を架け、各ペイは、いわゆる「バラディオ・モチーフ」を形づくっている。バラディオは、この建物を古代ローマのバジリカに匹敵せしめようとしたのである。既設の中世的ホールは、3廊式のヴォールトとした下階(現在は店舗になっている)に支えられて2階にあり、52.8m×20.7mの一室ホールで、半円筒形の木造屋根の裏をそのまま天井としており、この屋根と壁体上部が、バラディオのロτζアの上に現れている。

- Palladio, A., I quattro libri dell'architettura di Andrea Palladio, Venezia, 1570; Milano, 1945 & 1969
- Scamozzi, O. B., Le fabbriche e i disegni di Andrea Palladio, Vicenza, 1796, London, 1968
- Pane R., Andrea Palladio, Torino, 1948; 2nd., 1961
- Zorzi, G., Le opere pubbliche e i palazzi privati di Andrea Palladio, 1965
- Ackermann, J. S., Palladio, London, 1966 (中森義宗訳「バラディオの建築」彩国社)
- Puppi, L., Andrea Palladio, Venezia, 1973; Boston & London, 1975
- 福田晴彦「バラディオ」鹿島出版会, 1979
- Barbieri, F., The Basilica of Andrea Palladio, (Corpus Palladianum 2), Pennsylvania State University Press, 1970

## 56-3

**パラッツォ・キエリカーティ, ヴィチェンツァ, 1550年設計, 1580年ごろ完成** Palazzo Chiericati (Andrea Palladio) この邸宅は広場に面して建てられる予定だったので、バラディオは、古代の広場の周辺にあった歩廊になって、上下階とも全部開放的なコロネードとし、中央の5ペイがわずかに突出するという原案をつくっていた。実施された建物では、上階中央部が壁でふさがれることになったが、現存の図面によって、これもやはりバラディオ自身による設計変更と考えられ、開放的なロτζアと壁との対照という彼の最も重要なテーマの一つが、見事にまとめあげられている。バラディオの最も美しい作品の一つで、現在はヴィチェンツァの市立美術館である。

## 56-4

**ヴィラ・ジュリア, ローマ, 1551年起工** Villa Giulia, Roma (Giacomo Barozzi da Vignola; Giorgio Vasari; Bartolomeo Ammanati) 法王ユリウス三世のために建てられた別荘で、正面は中央に大きな突出部分を持つパラッツォに見えるが、その背面は大きな半円形のロτζアとなって大中庭に開放され、テラスはいったん少し上昇してから、大階段で半円形に凹んだグロツトのある低い庭に下り、螺旋階段で再び上って背後の庭園に入り、水門を経てテーベレ河に達する。各部分はそれぞれ壁に囲まれ、完全に独立した単位になっているが、軸線の上で連結され、レベルの急激な変化とともに、変化ある光

景が次々に展開されるように、工夫が凝らされている。ヴィニョーラ(1507～73)は、この別荘において、それまでの邸宅建築に見られない劇的な連続性を創造し、次の時代の建築を準備したと言える。同じころ、彼が枢機卿ファルネーゼのためにデザインしたカブラローラの別荘 Palazzo Farnese, Caprarola (1547～49)とともに、当代の巧緻な別荘建築を代表する作品である。ヴァザーリ、アンマナーティのほか、ミケランジェロも関係しているが、大半はヴィニョーラの作とみてよい。現在はエトルリア博物館となっている。

- Walcher-Casotti, M., Il Vignola, 2 vols., Trieste, 1960
- Ackerman, J. S. & W. Lotz, Vignoliana, New York, 1964
- Partridge L. W., Vignola and the Villa Farnese at Caprarola, 1, Art Bull., LII, 1970

## 56-5

**ヴィラ・ロトンダ(カブラ), ヴィチェンツァ, 1567年起工, 1570年完成** Villa Rotonda (Capra), Vicenza (Andrea Palladio) 神殿の原型は古代住居であると考えたバラディオの古典的理想を最もよく示す別荘建築で、中央に円形のホールを持つ2階建の正方形の建物の4辺に、モニュメンタルなイオニア式円柱のポーチコを付しており、彼の別荘建築には、ほとんどすべてこのように、神殿の前面が適用されている。バラディオの原案では、中央の円形ホールには半球形ドームとランタンがのせられるはずであった。徹底した対称形平面をとり、古典的要素は、細部の簡素なものを選び、煉瓦造スタッコ仕上げというバラディオ独特の経済的な構法を特色としており、質的にはかなりお粗末な建物である。バラディオの理想は、このような方形の中央建物の左右前方にコロネードの歩廊を延ばし、前庭を囲む構成であったと考えられ、それはヴィラ・パドエルとかヴィラ・トリッソのような別荘建築に示されている。バラディオの作品の特質は、その晴朗と優雅にあると言われるが、それらは建物そのものの質や古典性によるというより、彼の別荘建築が周囲の空間に呼応してつくり出す古典的世界の静寂の演出効果によるものであり、彼はミケランジェロとは異なった方法で、新しい様式の到来を準備していたと言っている。ヴィラ・ロトンダは、ヴィチェンツァ郊外の小高い丘の上に孤立して立ち、あたりは美しい立木に囲まれ、田園を見おろす、という静寂な牧歌的環境にあって、優雅な芸術的生活に格好の舞台装置とも言えよう。ヴィラ・ロトンダは、アルプス以北の諸国、特に18世紀のイギリスでもはやされた作品で、チズィックやミアワース(→76-4)のような模倣があるばかりでなく、その壁体部分の構成が、市街地住宅の立面の指標となっていた。つまり、オーダーそのものを用いないで、オーダーの比例と秩序を表現する壁面の区分法として応用されたのである。

- Semenzato, C., The Rotonda of Andrea Palladio (Corpus Palladianum 1), Pennsylvania State University Press, 1968
- Zorzi, G., Le ville e teatri di Andrea Palladio, 1968

## 56-6,7

**イル・レデントーレ聖堂, ヴェネチア, 1576～92年** Il Redentore, Venezia (Andrea Palladio) バラディオの晩年の作品で、彼の教会堂建築の理想を、最もよく示すものである。ルネサンスの建築家の課題であったドームを架けた集中堂と長堂の結合の問題を、彼は両者を重複させず、二つの部分に分け、身廊部はローマの浴場の広間のごとく、集中堂部分は縦軸方向の扱いを変えて、アプス側には列柱を半円形を描くように並べて祭壇背後のスクリーンとし、身廊部から望むと、全体が透視画的に、一連のものとして統一されるようにした。また、正面では、大小2個のペディメントを重ねた神殿正面を用いて、やはりルネサンス建築家の久しい課題であった聖堂正面の問題にも、独自の解答を与えた。バラディオは、このような用法も、ローマのパンテオンや、ヴィトルヴィウスの記述や、ブラマンテのプロジェクト(→53-5,8)に照らして、十分古典的であると考えていた。この教会堂には、正面の高さ(23m)の倍の高さのドームが

イドとしており、最上階だけをコロネードのロτζアとして、中庭側より新しい手法を導入しているが、扱いは不規則でルネサンスの原理を守っていない。

- Ganay, E. de, Châteaux de France, Paris, 1948-50
- Gébelin, F., Les Châteaux de la Loire, Paris, 1927

## 57-3

**アゼール・リドーの城館, 1518～25年** Château d'Azay-le-Rideau (Gilles Berthelot) 全体としてはL字形の平面であるが、その立面のうち3面は対称形をとり、蛇腹の水平線と薄いピラスターとで壁面を区分している。出隅の小塔、マチコレーションの形を持つ壁の上部、屋根、屋根窓などの輪郭に、中世城郭的なものをとどめているが、整然とした平面や急折階段は、明らかに新しい設計原理に基づいていることを示している。この城館は島の上の流れに近く建てられており、シュノンソーの城館(→57-4)の第1期工事の部分を模したものと考えられる。小さいが優美な建物で、失われゆく騎士道を追慕するようなロマンチズムが認められる。

## 57-4

**シュノンソーの城館, 第1期1515～22年, 第2期1556～59年(ド・ロルム担当), 第3期1576～81年(ピュラン担当)** Château de Chenonceaux (Philibert de l'Orme; Jean Bullant) トマス・ポイエーにより1515～22年に建てられた城館は、四隅に小塔を持つ正方形のブロックで、その中央を廊下が貫いていた。ディアヌ・ド・ボワチエはフィリベール・ド・ロルム(1505ごろ～70)に命じて、シェール河上にギャラリーを支える橋を架けさせ、この橋は1556～59年に建造された。しかし、ド・ロルムのギャラリーは結局建てられず、現存のギャラリーは、カトリヌ・ド・メディシスの命によって、ジャン・ピュラン(1522ごろ～78)が設計し、1576～81年に建造されたものと推定される。この部分の窓上のペディメントや窓間のパネル、マントルピースの処理には、イタリアのマニエリスムの特色が明瞭に示されている点が注目される。

- Blunt, A., Philibert de l'Orme, London, 1958

## 57-5

**シャンボールの城館, 1519年起工** Château de Chambord (Domenico da Cortona) フランソワ I世が1519年に、ジュリアノ・ダ・サンガルロの弟子で、「ル・ポッカドール」と呼ばれたドメニコ・ダ・コルトナに計画させたものと考えられ、おそらく彼の木製模型により同年に起工、1524～26年は工事中絶、キープは1537年ごろ、東翼は1539年ごろ、西翼は1550年ごろにも工事が行われていた。原案はかなりフランス的に改変され、キープの急折階段は、十字形通路の中央の著名な二重大螺旋階段に変わり、キープの1階周辺のアーケイド・ロτζアはとられ、壁面はアゼール・リドー式のピラスターと蛇腹の区画となり、シルエットは、円錐屋根、ランタン、煙突、小塔、屋根窓の林立する騒然たるものとなった。しかし、細部にはそれまで見られなかった純粋なイタリア様式の導入と理解が認められ、その完全に対称的な平面とともに、時代を画する作品となった。二重の大螺旋階段は、1516年以来フランスに滞在し、フランスで没したレオナルド・ダ・ヴィンチ(1452～1519)のデザインとも言われる。

## 57-6

**フォンテンブローの城館, フランソワ I世のギャラリー, 1530年代** Château de Fontainebleau, Galerie François Premier (Gilles Le Breton; Il Rosso; Sibec de Carpi) フォンテンブローは、ルイVII世が12世紀に建てた城館のあとに、フランソワ I世の命により、1528～40年に、石工長ジル・ル・ブルトンが大規模な建築を行ったもので、外観上特に見るべきものがないのに対して、イタリア美術家多数が参加した室内は当代を代表するものである。フランソワ I世のギャ

架かっているが、身廊部が長いので、建物のそばからは、ほとんど見えない。バラディオは、これより先、ヴェネチアの沖の小島に類似の正面をもつサン・ジョルジョ・マッジョーレ修道院聖堂 S. Giorgio Maggiore (1565～1610)を建てているが、そこでは二重ペディメントの神殿正面の課題が、まだ十分解決されず、中央部の4本のオーダーがペダスタルの上ののっている。

- Timofiewitsch, W., The Chiesa del Redentore (Corpus Palladianum 3), Pennsylvania State University Press, 1971
- Zorzi, G., Le chiese e i ponti di Andrea Palladio, 1966

## 56-8,9,10

**イル・ジェズ聖堂, ローマ, 1568～84年** Il Gesù, Roma (Giacomo Barozzi da Vignola; Giacomo della Porta) 反宗教改革時代の最も重要なジェズイット派の本部聖堂。平面は、アルベルティのサンタンドレア教会堂に基づいた集中形式を内包する単廊の長堂であるが、両側の礼拝堂の配列はより密集し、祭壇への方向とドームの存在は、より強められている。またヴォールト天井の横腹から豊かに採光し、光線の効果も一段と優れている。しかし、現在のイル・ジェズの内部は、身廊のヴォールト、ドーム、天井装飾などすべて、ヴィニョーラ(1507～73)の死後、1668～83年にバロック様式で改装されたものであり、壁の大理石化粧張りも19世紀中期になされたものである。また正面も、1570年の競技設計では、ヴィニョーラ案が当選したが、これは実施されず、現在の正面は、デッラ・ポルタ(1537ごろ～1602)とその弟子のデ・ロッシス、トリストウッチの設計で、中央部や中央部と側廊部をつなぐスクロールが、ヴィニョーラ案よりも強調されている。イル・ジェズの平面と正面は、17世紀のカトリック教団の教会堂建築に最も大きな影響を与えた作品であり、これに基づいた作品は数えきれない。

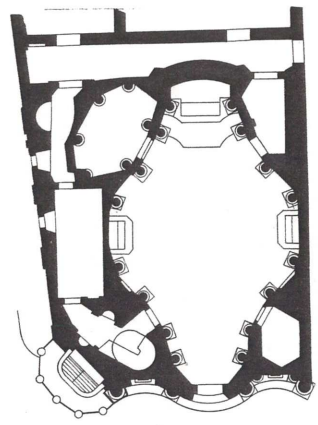
## 57-1

**パルマノヴァの都市計画, 1593年設計** Palmanova (Vincenzo Scamozzi) アルベルティは理想の理想的社会的建築的表現としての理想都市を構想し、フィラレーテは理想都市スフォルツィンダ Sforzndaの計画で、アルベルティの思想を具体化した。これは、中央広場に宮殿と大会堂を置き、そこから放射状に街路を配した八角星形であった。以後、多数の理想都市が提案されたが、実際に理想案どおりつくられたのは、ほとんどこのパルマノヴァのみである。ヴェネチア共和国の強固な要塞都市として計画され、星形の堀に囲まれ、9個の砲台で守られている。実施の結果、放射状街路の不利が確認され、以後イタリアの影響下に行われたルネサンスの都市計画では、星形あるいは多角形の市城塞のなかに格子状の街路を配するタイプが多く行われている。スカモツィ(1552～1616)はバラディオの後継者で、バラディオの遺作テアトロ・オリムピコ(1585)を完成したうえ、ヴェネチアの官庁建築プロクラツィエ・ノヴェ(1583)を建て、二つの著作「ローマ古代物論」(1582)、「普遍的建築の理念」(1615)でも著名であった。

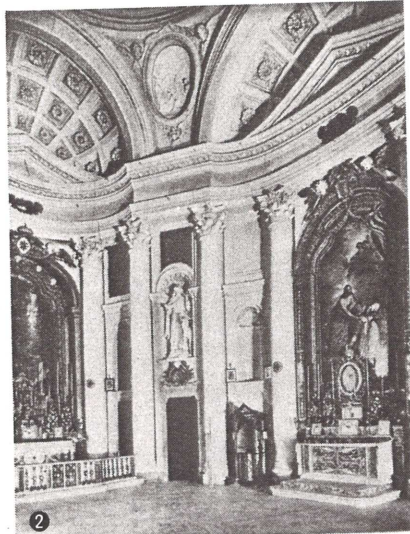
- Barbieri, F., Vincenzo Scamozzi, Vicenza, 1952

## 57-2

**ブロワの城館, フランソワ I世の翼屋, 1515～25年** Château de Blois, Paile François Premier 13～15世紀の城館の西へ増築された長さ54m、幅20mの翼屋で、壁面は比較的薄いピラスターで区分され、大コーニスを頂き、ドーマー窓、煙突の細部に至るまで、北イタリアのルネサンスの古典的モチーフが適用されている。大階段は、当時の翼屋部の中央に配置され、中世的な螺旋階段ではあるが、開放的につくられており、パットレスをピラスター形にかたどり、下部はイタリア風のアラベスクで飾ってある。17世紀に、この左方にオルレアン公の翼屋(→65-7)が増築されたので、全体の対称形が崩れ、大階段が左方に偏って見える。町に面する背面は、各層をアーケ



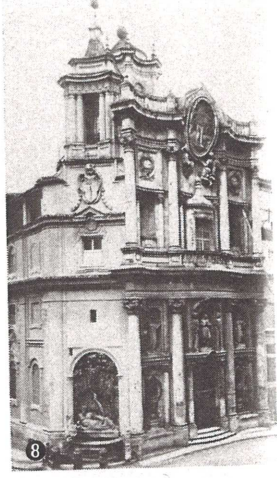
1 0 10m



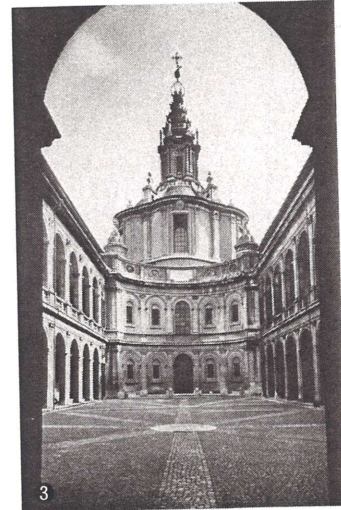
2



7



8



3



4



9



10



11

- 1,2,8 サン・カルロ聖堂, ローマ。ボルロミーニ, 1638起工
- 3,4 サンティ・ヴオ聖堂, ローマ。ボルロミーニ, 1642~50
- 5 サンティ・ヴィンチェンツォ・エド・アナスタシオ聖堂, ローマ。マルチノ・ルンギ・イル・ジョーヴァネ, 1650
- 6 サンタ・マリア・デッラ・パルチネ聖堂正面, ローマ。ボルロミーニ, 1653~55
- 7 サンタ・マリア・デッラ・パルチネ聖堂正面, ローマ。ビエトロ・ダ・コルトナ (1596~1669), 1656~57
- 9 パラッツォ・キジ・オデスカルキ, ローマ。ベルニーニ, 1664起工
- 10 サンタ・マリア・デッラ・サルテ聖堂, ヴェネチア。バルダッサレ・ロンゲーナ (1598~1682), 1631~82
- 11 パラッツォ・ペーザロ, ヴェネチア。ロンゲーナ, 1663~79
- 12 サン・ロレンツォ聖堂, トリノ。ガッリーニ, 1668~87
- 13 パラッツォ・マダマ, トリノ。ユヴァーラ, 1718~21。階段室



5



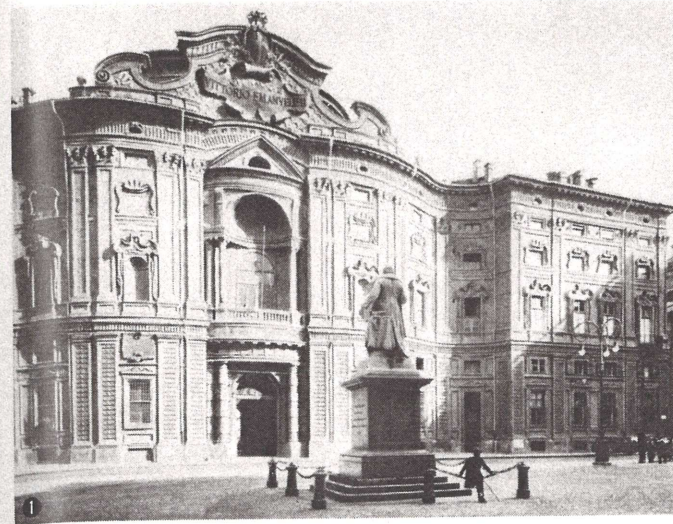
6



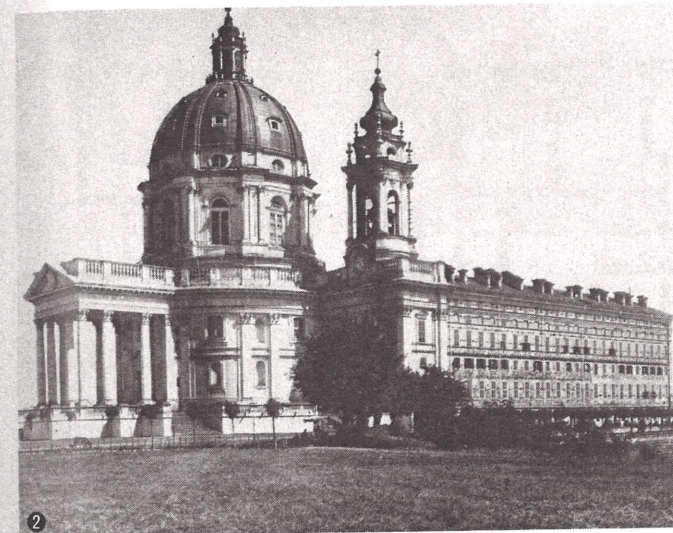
12



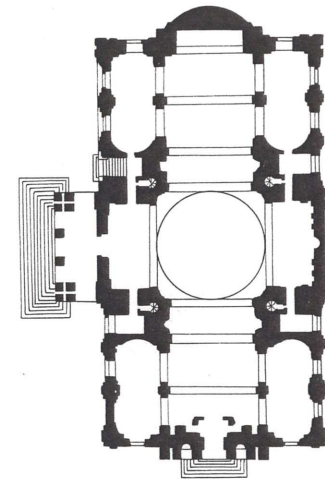
13



1



2



5

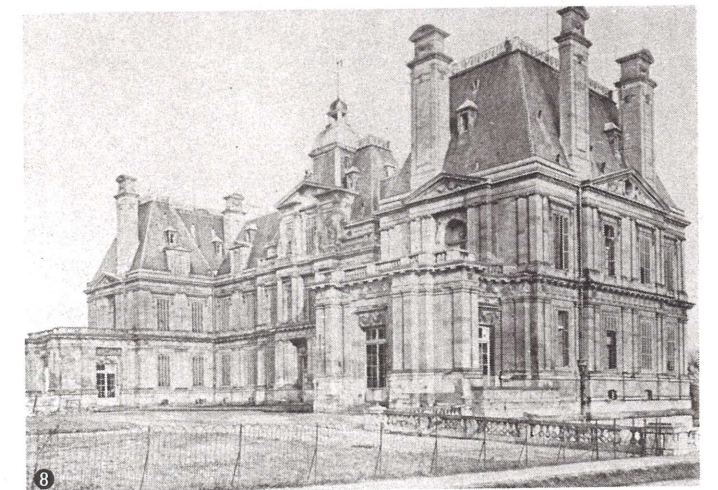
0 10m



6

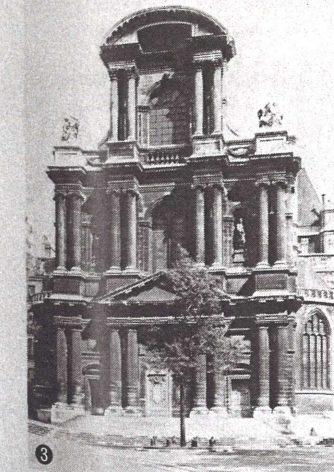


7

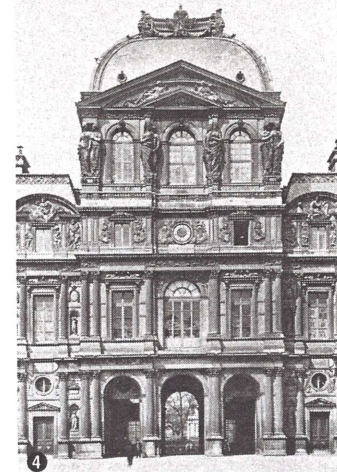


8

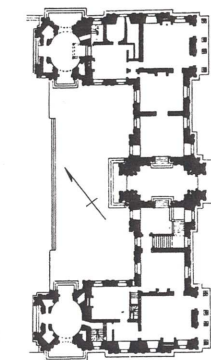
- 1 パラッツォ・カリニャーノ, トリノ。ガッリーノ・ガッリーニ (1624~83), 1679起工
- 2 ラ・スペルガ, トリノ。フィリッポ・ユヴァーラ (1676~1736), 1717~31
- 3 サン・ジェルヴェ聖堂, パリ。サロモン・ド・ブロッ (1562ごろ~1626), 1616~21
- 4 ルーヴル宮時計のパヴィルヨン, パリ。ジャック・ルメルシエ (1585~1654), 1624~25
- 5,6 ソルボンヌ教会堂, パリ。ルメルシエ, 1635~42
- 7 プロバ城館オルレアン公の翼屋, フランソワ・マンサール (1598~1666), 1635~38
- 8,9,10 シャトー・ド・メゾン, パリ近傍。マンサール, 1642~46



3

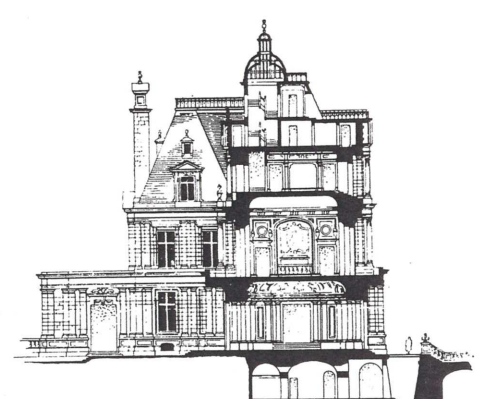


4



9

0 20m



10

0 20m

## 186 近世

階にはマニエリスト的な平たい特異な窓を一樣に並べ、大エンタブラチュアのフリーズには、再び大きな持送りをリズムカルに配置し、頂部にバラストレードを加え、入口にはトスカナ式の独立柱を用いてバルコニーを支えている。ペルニーニの様式は、全体の構成には極めて大胆で簡潔であり、同時に細部は抑制された細心さ、慎重に選び抜かれた比例に支配されており、まさに当代のややアカデミックな主流を形づくっていた。キジ・オデスカルキの邸宅は、バロックの邸宅の決定版となり、18世紀末に至るまで各国で多数の模作を生んだ。ペルニーニは、イタリアのみならず、アルプス以北においてもバロック最高の巨匠と見なされ、この邸宅をデザインした直後、ルイXIV世のためにバリのルーヴル宮改築の第1案に着手し、翌1665年に第2案を、同じ年バリを訪れて第3案を示し、基礎石を据え、再びローマに戻って第4案をつくった。これらは、ついに実施されなかったが、いずれもポディウムの上に大オーダーを用いる壮麗な計画案であった(→66-7)。

## 64-10

**サンタ・マリア・デッラ・サルテ聖堂, ヴェネチア, 1631~82年**

**S. Maria della Salute, Venezia (Baldassare Longhena)** 1630年の疫病大流行の終息を感謝して建てられた教会堂で、指名競技設計のロンゲーナ(1598~1682)による当選作である。八角形平面で、直径約20mの中央部は8本のコリント式円柱で囲まれ、その背後は半円アーチでつないだピアで周歩廊が形づくられ、その外側を玄関、6個のチャペル、背後の内陣部が、パトレスのように付着している。大ドームは高いドラムの上に立つ二重殻で、木造の小屋組を持ち鉛でふいてある。ドラムは16個のスクロール付きの巨大なパトレスで支えられており、この教会堂の著しい特色となっている。背後の内陣部の上には、ほぼ同形の小ドームが二つの塔にはさまれて立ち、パースペクティブな効果をあげているが、正面からは見にくい。内部では、周歩廊部分の半円アーチの重複によって、空間が実際より広く見え、パトレスの使用でドラムの窓が大きいので、極めて明るい。玄関前の階段も広く巧みで、水面すれすれのテラスまで滑らかに下り、教会堂そのものが直接海面に浮いているように見えるのも、ヴェネチアならではの特筆すべき効果である。

- Semanzato, C., L'architettura di Baldassare Longhena, Padova, 1954
- Wittkower, R., S. Maria della Salute; Scenographic Architecture and the Venetian Baroque, J. S. A. H., XVI, 1957

## 64-11

**パラッツォ・ペーザロ, ヴェネチア, 1663~79年** Palazzo Pesaro, Venezia (Baldassare Longhena) ロンゲーナはヴェネチアのバロック建築家を代表する人物で、ヴェネチアの伝統とバラーディオの影響を受け継ぎながら、それらを巧みに新しいバロック的傾向と融合した。サンタ・マリア・デッラ・サルテ教会堂(→64-10)は、その初期の代表作で、このパラッツォ・ペーザロは、後期の円熟を示す作品であるが、1679年までに完成したのは第2層までであった。全体の基本的構成は、中世後期やルネサンスのパラッツォと同様であり、中央の3ベイを強調する手法も伝統的である。しかし、1階のルスタカは極めて凹凸の鋭い活気あるものとなり、2階、3階の円柱は独立突出して、陰影を強め、ロンゲーナの死後、1710年ごろガスパリ Antonio Gaspari によって完成された最上階は、肉の厚い豊かな彫刻で飾られ、この傾向をいっそう強調している。他のヴェネチアのパラッツォと異なった特色として、隅角部が凹んで強調されていないこと、側面外壁にも正面のデザインがおよんでいる点があげられる。

## 64-12

**サン・ロレンツォ聖堂, トリノ, 1668~87年** S. Lorenzo, Torino (Guarino Guarini) 17世紀後期のトリノのバロック建築家グアリーニ(1624~83)は、当時の最も国際的な建築家の一人で、パリ、プラハ、リスボンなどの各地で活動した。この教会堂は、グアリーニが

スペインとポルトガルから帰国して、1668年に起工しており、徹底した曲線の使用、白、青、金の彩色と光の効果で知られる。平面はほぼ八角形であるが、各辺は壁面では凹面で、ドーム下では凸面になっている。特に興味深いのはドームで、ヴォールティングを建築の主要部分と考えたグアリーニらしく、8本の半円アーチを交錯させた特異なものであり、スペインの回教建築(コルドバのモスク、アル・ハキム建造の内陣部、965年)からアイデアを得ているが、頂部でリブのあいだの壁を打ち抜いて、さらに上部の構造を積み上げている。グアリーニの設計手法は、円形や楕円形の骨格を重複させて、交錯した空間を構成し、それを比較的薄い壁で連続させて、薄い平たい装飾的細部を適用するという特色を持ち、直接的証拠はないが、彼の手法は、18世紀の南ドイツのバロック建築に大きな影響を与えたと考えられる。グアリーニの建築書 *Architettura civile* (1738) は、ヴィットーネの手によって、1688年にすでに図集として出版されていたからである。

- Portoghesi, P., Guarino Guarini, Milano, 1956

## 64-13

**パラッツォ・マダマ, トリノ, 階段室, 1718~21年** Palazzo Madama, Torino (Filippo Juvara) フィリッポ・ユヴァーラ(1676~1736)はシチリアのメッシナに生まれ、ローマでカルロ・フォンタナ(1634~1714)に建築を学び、諸外国をめぐるのち、1714年ごろ、サルジニアとピエモンテの王ヴィットリオ・アマデオ二世の宮廷建築家となって、トリノの内外で活動したほか、広く各地を旅行し、死ぬ前年にはスペインのフェリペV世に雇われて王宮を設計し(→73-6)、マドリで死んでいる。トリノ市内の広場に面する王宮パラッツォ・マダマの階段室は、ラ・スベルガ(→65-2)およびストッピニジのカステルロ・レアレ Castello Reale, Stupinigi (1729~33)と並ぶ彼の代表作の一つである。モニュメンタルな階段に対する興味は、まず16世紀のスペインに現れ、各種の形式が考案され、次いで北イタリアのバロックの邸宅建築で熱心に追求された。パラッツォ・マダマの場合も、大階段に対する興味から、既設のパラッツォに、この大階段ホールを含む正面のブロックがわざわざ付け加えられたのである。玄関ホール部後から左右に別れ、緩やかに上昇して踊場で急折して、玄関ホール上階の南部で合流して、ピアノ・ノビレに導く。これら全体が3階の高さまで吹き抜かれた一つの室内に、悠然と仕組まれていて、まことにぜいたくな感じがするが、写真のように一端から他端まで見通され、壮麗な三次元的効果をもたらしている点は、ちょっと比類がない。装飾彫刻は極度に様式化した平坦なモチーフと極度に写実的な彫刻を対照的に配置したユヴァーラ独自のものである。外観はヴェルサイユ宮の庭園側を模したもので、優秀ではあるが内部ほど独創的でない。こうしたトリノのグアリーニやユヴァーラ、ジェノヴァのパルトロンメオ・ビアンコ Bartolomeo Bianco (1589ごろ~1657)の大階段に対する関心と努力は、直ちにドイツ・バロックによって引き継がれていく(→70-7, 8; 71-8)。

- Rovere, L., F. Viale & A. E. Brinckmann, Filippo Juvara, Milano, 1937
- Pommer, R., Eighteenth Century Architecture in Piedmont, London, 1967

## 65-1

**パラッツォ・カリニャーノ, トリノ, 1679年起工** Palazzo Carignano, Torino (Guarino Guarini) グアリーニの最も著名で、極めて独創的な邸宅作品の一つ。建物全体はH字形平面で、煉瓦とテラコッタの外壁を持ち、湾曲した前面中央部2階に楕円形広間があって、大階段は2階のバルコニーに向けて上昇している。この平面は、ポルロミーニのパラッツォ・カルペーニャ Palazzo Carpegna, Roma の計画案(1643ごろ)およびペルニーニのルーヴル宮第1計画案(1664)に基づいていると言われるが、細部および装飾はグアリーニ独自の様

式で、スペイン、ポルトガルの影響を示す特殊かつ効果的なものであり、ルスタカしたパネルの入ったピラストル、窓まわり、エンタブラチュアの意匠などが注目に値する。

## 65-2

**ラ・スベルガ, トリノ, 1717~31年** La Sperga (Basilica di Sperga) Torino (Filippo Juvara) ラ・スベルガはトリノ郊外の丘上に立つ宮廷の埋葬教会堂および修道院より成り、サン・ピエトロ型のドームを架けた集中形式の聖堂の背後に内陣部を突出させ、ポルロミーニ型の鐘塔で接続部をはさんで、その背面から多層の簡素な修道院の建物が15mに20mの中庭を囲んで接続されている。その接合法は、驚くほど無雑作で率直であり、両者のスケールの差を無視しているが、モニュメンタルな階段を付けた大ポーチコと、そこから聖堂部分に連続的にめぐらしたバラストレードによって巧みにバランスされており、ドラムの柱とドームのリブをつなぐ力強い上昇線を持つドームで見事に統一されている点に、作者の傑出した力量を認めることができる。しかし、歴史的にみると、スベルガは決して新しい動きの出発点ではなく、当時の建築技法の総決算とも言うべき作品で、主要な構成はペルニーニやポルロミーニに負うところが極めて多い。この教会堂の目のさめるような効果の一つは、その明朗な彩色で、薄青、ピンク、クリームなど薄い色を基調とした壁の色は、いわゆるロココのトーンで、荘重華麗なローマのバロック建築とは全く異なった新時代の精神を象徴している。

## 65-3

**サン・ジェルヴェ聖堂正面, パリ, 1616~21年** St. Gervais, Paris (Salomon de Brosse) ド・ブロッソ(1571~1626)によるこの正面は、この時期のフランス聖堂建築における最も重要な作品である。アイデアとしては、ド・ロルムのアネの城館などに用いられた凱旋門モチーフをそのままとって、入口の上にペディメント、全体の頂部に曲線ペディメントを置いたものにすぎないのであるが、次の世代のカトリック聖堂の正面構成をほとんど決定した模範的解決と見なされた。サン・ジェルヴェの場合には、建物の本体が後期ゴシックなので垂直性が強く、したがって、通例のルネサンス式の教会堂なら2層ですむところを、オーダーを3層に重ねてある。この正面の作者をメトゾー Clément Métezeau とする説もあるが、ド・ブロッソ説を改めねばならないほど有力ではない。

- Coope, R., Salomon de Brosse, London, 1972

## 65-4

**ルーヴル宮の時計のパヴィルヨン, パリ, 1624~25年** Palais du Louvre, Paris, Pavillon de l'Horloge (Jacques Lemercier) ルメルシエ(1585~1654)は1580~85年ごろの生まれで、ローマに数年間学び、1614年帰国し、宰相リシュリューの知遇を得て、1624年、ルーヴル宮中庭の工事続行を命ぜられ、レスコーの建物を倍増する西館の建造にかかった。ルメルシエは、レスコーの翼屋の立面を北側にもう一度繰り返す間に、この時計のパヴィルヨンを建てた。下階3層は、レスコーの立面にあわせ、その上にカリアチドが三重のペディメントを支える立面の階を付け、さらに大きな角型ドームで覆っている。三重のペディメントは、イタリア・バロックのモチーフであり、角型ドームは、デュセルソーI世も使い、ド・ブロッソも、プレランクルの城館(1619年ごろ完成)で用いていたもので、ルメルシエ愛好のモチーフであった。

## 65-5,6

**ソルボンヌ聖堂, パリ, 1635~42年** Chapelle de la Sorbonne, Paris (Jacques Lemercier) パリ大学の礼拝堂で街路に面する側からと大学の建物の中庭からと、二つの正面と軸線を持っている。中央のドームをはさんで、身廊と内陣が同じ大きさを持ち、対称性が極めて強

い。イル・ジェズの影響は、街路側の正面や短い袖廊に明らかであるが、ドームはドラムにのせた二重殻として高め、外観、特に独立柱を立てたポーチコのある中庭側からの効果のみでなく、ドームから遠い街路側の主正面とのバランスを目的としている。この教会堂の平面とドームは、ルメルシエのローマ滞在中に起工されたサン・カルロ・アイ・カタリナリ聖堂 S. Carlo ai Catinari (ロサト・ロサティ Rosato Rosati 設計, 1612年起工)のそれを模したもので、ルメルシエは、当時のローマにおいては反バロック的な、ややアカデミックな傾向の建築を導入したことになる。

## 65-7

**ブロワの城館, オルレアン公の翼屋, 1635~38年** Chateau de Blois, l'aile Gaston d'Orléans (François Mansart) フランソワ・マンサール(1598~1666)の初期の経歴はよくわからないが、おそらくド・ブロッソの弟子で、民間建築家として次第に名声を高め、1635年、王弟ガストン・ドルレアンのためにブロワの城館を改築する計画を立てることになった。マンサールの計画では、既存の建築を全部破壊して、非対称形の壮麗で自由なリュクサンブール形式とする予定であったが、実際にはこの主館が建てられただけであった。中庭側入口の両側には、曲線を描いてコロネードが立ち、この玄関の軸は、背面の庭園側入口の軸とずれており、かつ庭園側の地盤面が高いが、中央パヴィルヨンを占める大階段室で巧みにこれを隠し、かつ中庭側の壁面はオーダーを3層重ね、外庭側の1階はポディウム風の壁に入れ替えている。またマンサールは曲面を持つ角型ドームを嫌い、急傾斜の直線的な屋根を架けた。これはマンサールによって著名になった屋根形式で俗にマンサール屋根と呼ばれたが、彼の発明ではなく、ド・ブロッソもすでに用いている。マンサールのデザインの特色は、建物全体が、単なるファサードの寄せ集めでなく、三次元的に巧妙に大胆に構成され、細部は柔らかく、壁体につかず離れず、典雅で安定し、空間と陰影の豊かさや力強さが、ほどよく優雅に抑制されている点にある。このブロワの新館は、こうしたマンサールのスタイルの絶頂期を示す作品で、特にこの中庭側のコロネードと中央パヴィルヨン内の階段室が著名である。

- Braham, A. & P. Smith, François Mansart, 2 vols., London, 1973

## 65-8, 9, 10

**メゾンの邸館, 1642~46年** Château de Maison (François Mansart) サン・ドニの西方16kmにあり、ルイXIII世の大臣ルネ・ド・ロンゲイユの邸宅として建てられた。長方形の主屋の両端にパヴィルヨンを付した形式で、パヴィルヨンには、さらに1階建の楕円形ホールのある突出部があり、上はテラスとなっている。建物各部の処理は、それぞれの部分で異なっていて、ブロワより複雑であるが、巧みなピラストルの用い方で統一され、特に隅角部に角柱のようにピラストルを配して、鋭くまとめあげるところは、マンサール独自の用法である。中央の玄関ホールの天井は大きなコーヴ線形を持ち、その四隅に鷲の彫刻を置き、右手の壮麗な階段室を上昇すると、上階中央と左手にまたがって大ホールがあり、やはり大きなコーヴを付けた天井がある。玄関ホールや階段室のパネルやピラストルの彫りは、浅く柔らかで、石の生地そのままを出し、彩色やめっきを全く施さない。40年代のマンサールの様式は、ブロワ時代よりも、平面や構成ではより自由になり、装飾ではより古典主義的になったと考えられ、メゾンの邸館は、こうしたマンサールの成熟期のスタイルを代表する傑作で、ことに内部が創建時のまま保存されている点で貴重な遺構である。なおメゾンは、19世紀の所有者であった銀行家の名をとって、メゾン・ラフィットとも呼ばれてきた。

- Stern, J., Le Château de Maisons, Paris, 1934

## 66-1,2

**オテル・ランベール, パリ, 1640年ごろ~60年** Hôtel Lambert,

Toy, S., A History of Fortification from 3000 BC to AD1700, London, 1955 [48-4]  
 Toy, S., The Castles of Great Britain, London, 1966 [48-5]  
 Tschubinaschwili, G. [28-11]

U. D. F-La Photothèque [32-7, 33-9, 33-10]

Van der Heyden, A. A. M. & H. H. Scullard, Atlas of the Classical World, London, 1959 [11-6, 17-6, 22-4]

Vandersleyen, C., Das Alte Ägypten, Propyläen Kunst Geschichte, Bd. 15, 1975 [4-6]

Les vieux hôtels de Paris, 1920 [74-3]

Viollet-le-Duc, E. E., Dictionnaire raisonné de l'architecture française, Paris, 1868, VI [50-1, 50-5, 50-7]

Vincent et Abel, P. P. [25-11]

Vitry, B., Notre-Dame de Reims, Paris, 1958 [40-3]

Vogüe, M. de [25-10, 27-5]

Volbach, W. F., Early Christian Art, London, 1961 [25-2, 25-4, 25-6, 25-7, 26-6, 26-7, 26-11, 27-10, 28-14]

Wagner, G. [33-2]

Ward-Perkins, J. B., Architektur der Römer, 1975 [17-9, 24-4, 24-5]

Weaver, J. R. H. [38-10]

Webster, T. B. L., Le Monde Hellénistique, Paris, 1969 [15-4]

Whittick, A., European Architecture in the Twentieth Century, London, 1950 [86-9]

Wiegand, Th., B. Schulz & H. Winnefeld and others, Baalbek, Bd. 1, Berlin, 1921 [21-3]

Wölfflin, H., Renaissance and Baroque, 1961 [54-7]

Woolley, Sir L., Ur Excavations, vol. V, London, 1939 [6-5]

Y. A. N. [59-6]

Yerbury, F. R. [78-6]

Yvon, Paris [57-4]

Zentralinstitut für Kunstgeschichte, München [56-10]

Zodiaque, Pierre-qui-Vire [36-6]

## 西洋建築史図集

1953年6月10日 第1版発行  
 1973年4月10日 再訂第1版発行  
 1981年12月10日 三訂第1版発行  
 1983年4月10日 三訂第2版発行  
 1994年12月10日 三訂第2版 第16刷

著作権者との  
 協定により  
 検印廃止

編者 日本建築学会  
 発行者 山本泰四郎  
 発行所 株式会社彰国社



自然科学協会会員  
 工学書協会会員

Printed in Japan

© 日本建築学会 1981年

160 東京都新宿区坂町 25  
 電話 03-3359-3231(大代表)  
 振替口座 00160-2-173401

ISBN4-395-00021-5 C3052

製版・近藤製版 印刷・真興社 製本・昇栄社

定価はカバーに表示してあります。